

平成 24 年 2 月 13 日 提出

石垣りんの詩がもつ教材としての可能性
—ジェンダーの視点から—

教科教育専攻 国語教育専修

山下 麻衣

目次

序章 はじめに	1
第1節 研究の動機と目的	1
第2節 研究の方法	2
第1章 石垣りんの生い立ちとその生きた時代	4
第2章 教科書掲載作品についての考察	9
第1節 「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」	12
第2節 「崖」	13
第3節 「シジミ」	15
第3章 「表札」	17
第1節 教材観	17
第2節 昭和49年に提案された学習課題の考察	19
第3節 現在の学習課題の考察	23
第4節 過去と現在における学習課題の比較と考察	25
第4章 現在の教科書課題にみられる特徴と傾向	27
第1節 「崖」	27
第2節 「シジミ」	28
第3節 本章のまとめ	29
第5章 石垣りんの詩を用いた新しい授業の提案	31
第1節 「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」を教材にした授業	31
第1項 学習課題	31
第2節 「儀式」を教材にした授業	32
第1項 教材観	33
第2項 学習課題	34
第3節 2つの詩を比較して読む授業	36
第1項 「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」と「儀式」との関連性	36
第2項 学習課題	37
第4節 「喜び」を教材にした授業	38
第1項 教材観	38
第2項 学習課題	40

第5節 本章のまとめ	41
終章 研究の成果と今後の課題	43
謝辞	45
引用・参考文献一覧	46
資料	49
「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」	49
「崖」	51
「シジミ」	52
「表札」	53
「儀式」	54
「喜び」	55

序章 はじめに

第1節 研究の動機と目的

なぜジェンダー¹について考えるのか。1979年国連総会にて女性差別撤廃条約が採択され、国内でも女性差別撤廃の動きもあり、1985年「男女雇用機会均等法」が制定された²。このような制度の中で、教育の現場でも「男女混合名簿」などが採用されるようになり、子どもたちの意識にある性別役割分業やそれに基づく職業観・人生観を見直していく動きがみられるようになった。国語科教育においては、性別役割分業に基づく男女像が描かれた教材などは教科書の中から除外された。例えば、男性作家の作品が多く使われていたことによって、暗に学習者は作家＝男性という職業観を与えられてきたが、現在では女性作家の作品の比率も増えたということが言える。しかし、教材の登場人物の話し方や語り手の語り方を見ていくと今なおステレオタイプな男女像が見られ、私たちの生活の中に男らしさや女らしさのレッテルは消えることはない。子どもたちは学校で大半の時間を過ごし、学校という集団生活の中で自己のアイデンティティを作り出していく。そのため、学校の授業で取り扱う教材や周囲の環境が子どもたちのジェンダー意識の形成に大きな影響を及ぼしている。周りの教師や生徒たちの何気ないやり取りの中で、性認識が形成されていく。国語教育では、学習者は教材との対話³を通じて様々な情報を入手し、書かれた内容を自らの中に消化していく。人間は言葉によって物事を認識していくのであり、言語活動を中心に行われる国語科の授業からジェンダーの問題を認識することができると言える。もし教材に偏った男女観が書かれていて、授業でその内容に疑問を抱かず、鵜呑みにしてしまっていたら、子どもたちの思想や価値観も偏った男女観になってしまうだろう。しかし、授業の中でそのような教材を批判的に見たり、価値観を揺さぶるような内容の教材を取り扱うことができれば、子どもたちのジェンダーに対する問題意識を高めることができるのではないか。教材の内容に疑問や違和感を抱いたり、逆に納得したりすることを通して、新しいものの見方や自分自身の問題を解決していく過程で子どもたちは自分たちの男女観を見直していくことができると考えられる。教材自体がジェンダーの問題に言及する内容のものを扱うことで、それまで子どもたちが抱いてきた価値観に揺さぶりをかけ、自分自身の問題として考える機会になるだろう。

ジェンダーの問題を考えるための教材として石垣りんの詩に目を向けようと思う。牛山

¹ ジェンダーとは、社会的文化的性別を意味する学術用語である。金井一郎ほか著『学術会議叢書 14 性別とは何か—ジェンダー研究と生物学の対話』（2008）財団法人 日本学術協力財団 p.7 江原由美子の定義による。

² 神埼智子（2009）『戦後日本女性政策史—戦後民主化政策から男女共同参画社会基本法まで』明石書店 pp.246-248 参考。

³ 立川健二・山田広昭（1990）『ワードマップ 現代言語論 ソシユール フロイト ウィトゲンシュタイン』新曜社 「対話 ミハイル・バフチンとともに」 pp.176-181 参考。

恵「国語教材論—ジェンダーと国語教材—」⁴で「ジェンダーからの解放を目指す教材」の視点を4つ挙げている。

- ①筆者、作者が女性である作品
- ②女性の登場人物がいて、その人物の描かれ方が類型的ではないこと
- ③男女の関係が類型的でなく、おたがいを認め合って共に生きる者であること
- ④男女の差別や役割意識の現実に対する批判的な視点に立つものであること

石垣りんの詩はこの4つの視点に当てはまる教材として取り扱うことができると考えられる。その多くの詩がこれまでの教科書に掲載されてきたが、詩の授業はあまり重要視されず、学習者の記憶にもあまり残っていない現状である。しかし、作者は短い詩の中で自身の主張を表現し、読み手に印象づける。作者の語り方に目を向け、詩から情報を読み取することは国語科の学習として意味あることであると考えられる。石垣りんの詩が実際の授業でどのように活用されてきたのか、そしてこれからどのように活用していくことが必要とされているのかを考えたい。

石垣りんの詩は戦後の変化していく社会で女性がどのように生きてきたか、女性への抑圧にたいして女性たちはどのように生きていかなければならなかったのかをとっても生々しく描いている。働く女性の目線から、日常にある多くの物事を多角的にとらえ、詩によって表現する。読み手は驚くような発見をして、自己を見つめなおすことができる詩であろう。読み手は書かれていることから読み手の思想に寄り添い、当時の価値観や社会背景を読み取っていく。戦後の女性像と現代を比較することで、学習者の中に葛藤が生じ、ジェンダーの問題を追及することが可能である。そのような石垣りんの詩が教材としてどのような価値があるかを明らかにしていくことを目的とする。

第2節 研究の方法

教科書に掲載されている詩を取り上げ、その詩をどう読み、そこに教材としてどのような価値があるかを見出す。そして、石垣りんの詩教材が現在どのように扱われているかを、教科書の「学習の手引き」により考察し、教科書が示す教材観や想定する授業を考える。特に「表札」では、昭和49年に提案された学習課題の在り方を示したものと現在の教科書の「学習の手引き」とを比較することで、それぞれの学習課題にみられる特徴や傾向を捉え、現在の学習課題の問題点を見出していく。石垣りんの詩教材が今日の授業においてどのように扱われるべきかを考え直し、どちらの学習課題にも見られないような新しい問いを提案することで、国語教材としての可能性を広げていく。過去と現在の学習課題の比較から得られた改善点をふまえた上で、ジェンダーについて考えていくことを課題とした新しい授業を提案する。授業の提案では教材としての可能性を広げるために、今まで教

⁴ 田近洵一（1996）『国語教育の再生と創造—二一世紀へ発信する十七の提言』教育出版 pp.246-247 より抜粋。

科書に掲載されてきた詩や教科書に掲載されていない作品、複数の詩を取り上げて比較しながら、詩に対する学習者の読みを深める授業を提案していく。

第1章 石垣りんの生い立ちとその生きた時代

石垣りんについて⁵

大正九・二・二一～平成十六・十二・二六。詩人。東京都港区赤坂の生れ。仁、すみの長女。父は薪炭商。母には四歳のとき死別。その後、つぎの母もまたつぎの母もやがて死に、四度目の母を迎えるというすこし複雑な家庭に育つ。小学生のころからだれに教わることもなく少女雑誌に詩を投稿。家計ためではなく、早く社会に出て自立したいという意欲から、高等小学校を卒業して昭和 9 年に日本興業銀行に勤務。以後、戦争をはさんで長く同じ職場にあり、独身を守る。こうしたじみで堅実な生活の持続から、自己を支えてくれると同時に苛む社会や家庭への鋭い批判を含むところの、人間への温かいいたわりの詩が生まれた。それは認識のゆとりからくるユーモアをときに漂わせる、残酷な目と優しい心の独特な結びつきによるもので、そうした女性の詩が自分の職場の組合新聞や、金融機関の組合連合の年刊アンソロジー『銀行員の詩集』を通じて、昭和二十年後半ごろから頭角を現したのはいかにも戦後的であった。ところで、戦争中の彼女の文学的な出発は詩と小説の試みを並行させたものである。昭和一八年、ある雑誌への投稿仲間十数人の女性と同人誌「断層」を創刊し、民衆派の詩人福田正夫の指導を仰いだ。その前後の時期の彼女の詩よりはむしろ庶民的で写実的な短篇小説に腕を示し、それはあとからふりかえると、まるで戦後にリアリズムの詩を開花させる運命的な準備をしていたように見える。戦後詩人の中でも、散文から詩への道を、敗戦の解放的な面を通じてたどった経歴は異数だろう。

石垣りん自筆年譜⁶

1920（大正 9）年 2 月 21 日 父仁、母すみの長女として東京赤坂に生まれる。家族は他に祖父弥八、祖母さく。家業薪炭商。

1922（大正 10）年 2 月 弟達雄生まれる。

1923（大正 12）年 9 月 関東大震災。

1924（大正 13）年 1 月 妹さく生まれる。3 月 母すみ死去。前年の震災時、子供をかばって落ちて来た梁を背に受けたのが病気の原因という。生まれたばかりの妹さくは、静岡県伊豆の母の実家に預けられる。

1925（大正 14）年 仲之町小学校付属幼稚園に入園。一人で通えず、祖母と弟が弁当持参で付き添ったという。

1926（大正 15・昭和元）年 仲之町小学校入学。学校へ行くのがいやで泣いて困らせた記憶がある。4 月 祖母さく急逝。

⁵ 日本近代文学館『日本近代文学大事典 第一巻』（1977）講談社 清岡卓行 pp.92-93 より抄録。

⁶ 小田啓之『現代詩手帖特集版 石垣りん』（2005）思潮社 「石垣りん自筆年譜」pp.220-222 より抜粋。（1998 年 4 月以降編集部補足）

1927（昭和2）年9月 父亡妻の妹きくと再婚。
1929（昭和4）年7月 母きく死去。
1930（昭和5）年 父、千葉県から妻すづを迎える。
1931（昭和6）年2月 妹初江生まれる。
1932（昭和7）年 赤坂高等小学校入学。放課後氷川図書館によく通う。詩集を読み、詩を書いて作文の時間に提出したりする。
1933（昭和8）年 妹薫子生まれる。
1934（昭和9）年4月 日本興業銀行に事務見習として就職。就職難の時代に、初任給18円昼食支給は好条件であった。勤めの余暇を投稿（「少女画報」「女子文苑」）に専念する。当初のペンネームは、夢路りん子、御空ゆき、青空美加。
1935（昭和10）年3月 弟利治生まれる。
1936（昭和11）年5月 妹初江、千葉県の伯父夫婦の養女となる。6月 妹薫子急逝。
1937（昭和12）年4月 父、すづと離婚。
1938（昭和13）年1月 父妻隆子を迎える。妹さく伊豆から戻る。4月 文書課事務員になる。11月 投稿誌「女子分苑」の詩の選者の福田正夫の指導を得て女性だけの雑誌「断層」を創刊、同人13人。
1940（昭和15）年5月 調査部へ異動。
1941（昭和16）年1月 「女子分苑」に短篇「荷」を発表。9月 「女子分苑」「断層」に合併。12月 太平洋戦争開戦。
1942（昭和17）年5月 千葉県ですづ死去。10月 妹さく入院先の伊豆松崎で死去。
1943（昭和18）年5月 「断層」に短編「幕張行」発表。7月 弟達雄出征。11月「断層」終刊。
1945（昭和20）年5月 空襲で家屋全焼。当夜、祖父は伊豆に、弟利治は学童疎開で留守。父母と3人残っていたが身体無事。数日間防空壕で過ごした後、父母は品川の知人宅へ避難。約1ヶ月伊豆に滞在、7月、帰京して銀行の女子寮に入る。8月 敗戦。品川の路地裏にある10坪ほどの借家に、分散していた家族6人が徐々に集まる。
1946（昭和21）年 職場では「行友会誌」「行友ニュース」少しおくれて「組合時評」等が発行され、随時詩その他を載せる。
1948（昭和23）年 詩誌「銀河系」同人に参加。「峠」「それを見るのは」「この世のなかにある」「0」を発表。
1950（昭和25）年4月 職員組合執行部常任委員になる。任期半年。メーデーに初参加。6月 朝鮮戦争勃発。レッド・ページも始まっている中で、委員会は緊迫、活気に満ちていた。7月 詩誌「時間」同人に参加。1年足らずで辞す。
1951（昭和26）年アンソロジー『銀行員の詩集』（1951年版）全国銀行従業員組合連合会刊行。選者壺井繁治、大木惇夫両氏。「原子童話」「用意」「白いものが」「よろこびの日に」4篇収録される。『銀行員の詩集』は以後年1回選者を替えて計10冊刊行。

1952（昭和 27）年 『銀行員の詩集』（1952 年版）伊藤信吉、野間宏両氏により「祖国」「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」ほか 2 篇選ばれる。4 月 考査部へ異動。

1953（昭和 28）年 4 月 祖父弥八死去。

1954（昭和 29）年 10 月より翌年 3 月まで職員組合執行部常任委員。

1957（昭和 32）年 12 月 父仁死去。

1958（昭和 33）年 11 月 椎間板ヘルニアにて慶應病院整形外科に入院手術。化膿して後三回手術を受ける。

1959（昭和 34）年 4 月 退院、銀行の鎌倉腰越寮にて 8 月末まで療養。9 月 復職、業務部に配属される。12 月 第一詩集『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』書肆ユリイカより刊行。快気祝いの品物として配る。

1960（昭和 35）年『銀行員の詩集』1960 年版にて終刊。

1965（昭和 40）年「歷程」同人に参加。

1966（昭和 41）年 4 月 経営研究部へ異動。

1968（昭和 43）年 12 月 詩集『表札など』思潮社刊。

1969（昭和 44）年『表札など』第 19 回 H 氏賞受賞。

1970（昭和 45）年 東海テレビ制作ドキュメンタリー「あやまち——一九七〇年夏・四日市」に詩を書く。11 月 大田区南雪谷アパートに引越す。一人暮らしとなる。

1971 年（昭和 46）年 7 月 行友会事務室へ異動。12 月 『現代詩文庫 46 石垣りん詩集』思潮社刊。第一、第二詩集の全詩及び「構成詩あやまち」、未刊詩篇等を収録。

1972（昭和 47）年『石垣りん詩集』第 12 回田村俊子賞受賞。4 月 管理部所属となる。（株）興銀データサービス出向。

1973（昭和 48）年 2 月 散文集『ユーモアの鎖国』北洋社刊。

1974（昭和 49）年 4 月 母隆子死去。

1975（昭和 50）年 2 月 20 日、日本興業銀行を定年退職。

1979（昭和 54）年 5 月 詩集『略歴』花神社刊。第 4 回地球賞受賞。7 月 妹初江、千葉県婚家先で死去。

1980（昭和 55）年 3 月 散文集『焰に手をかざして』筑摩書房刊。

1981（昭和 56）年 5 月 『ユーモアの鎖国』講談社より再刊。11 月 編著『家族の詩』（詩のおくりもの 3）筑摩書房刊。

1983（昭和 58）年 9 月 『現代の詩人 5 石垣りん』中央公論社刊。

1984（昭和 59）年 4 月 詩集『やさしい言葉』花神社刊。

1987（昭和 62）年 11 月 詩集『略歴』石垣りん文庫 3 として再発行、花神社刊。12 月 文庫『ユーモアの鎖国』筑摩書房刊。石垣りん文庫 4『やさしい言葉』花神社刊。

1988（昭和 63）年 2 月 石垣りん文庫 1『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』花神社刊。この年「歷程」同人を辞す。

1989（昭和 64・平成元）年 2 月 弟達雄死去。5 月 石垣りん文庫 2『表札など』花神社

刊。散文集『夜の太鼓』筑摩書房刊。

1992（平成4）年9月 文庫『焔に手をかざして』筑摩書房刊。10月 編著『詩の中の風景』婦人之友社刊。12月 大活字本『夜の太鼓』埼玉福祉会刊。

1994（平成6）年12月 大活字本『焔に手をかざして』埼玉福祉会刊。

1997（平成9）年1月 選詩集『空をかついで』童話屋刊。

1998（平成10）年6月 文庫『石垣りん詩集』角川春樹事務所刊。

2000（平成12）年3月 『表札など』10月 『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』童話屋より再刊。5月 NHK ニュース番組「おはよう日本」に出演。

2001（平成13）年2月 文庫『夜の太鼓』筑摩書房刊。6月『略歴』童話屋より再刊。

2002（平成14）年6月『やさしい言葉』童話屋より再刊。

2004（平成16）年6月 脳梗塞で都立荏原病院へ転院。同所に入園する弟利治と再会を果たす。20日後、12月26日、心不全のため死去。享年84。

2005（平成17）年1月15日 両親の眠る南伊豆町西林寺へ納骨。2月7日 お茶の水・山の上ホテルにて、「さよならの会」が行われ、およそ300人の参加者が詩人を見送った。

生きた時代について⁷

戦前の女性がおかれた立場は現在とは大きく異なり、女性の労働条件でいえば男性との賃金格差や労働内容の違い、家庭では家父長制などにみられる男性優位の制度など女性の立場はかなり低いものであった。戦中は、多くの女性が戦争の犠牲になり、命を落としていった。このような時代から女性の立場が大きく変化したのは、戦後の民主化政策以後のことである。

戦後の民主化政策により女性には多くの権利を得た。政治の分野では1945年「婦人参政権」を認めることにより、男女の平等は法により定められた。社会的分野においては、「労働基準法」により、戦前にみられた女性労働の劣悪な環境は改善された。しかし、この法律は「女性は保護すべき弱者」という立法担当者たちの思い込みによって、女子保護規定しか見えない立法であった。そのため女性の健康維持のためには役割を果たしたが、女性が労働の場において一人の人間として、男性と同じように働くという点において、欠陥を持った立法となった。社会の女性に対する考え方として、社会における女性の責任は家庭を守ることにあるという考えが労働基準法に反映していたということも男女平等の雇用条件に達することができなかった要因である。

1954年から高度経済成長期に入り、女性の就学率・進学率が上昇したことによって、女性労働者も増加していった。そして、1985年女子差別撤廃条約承認から、あらゆる法改正が行われ、男女の固定的な役割分担を変え、女性に役割であった家庭責任は男女が共同で分担すべきであるという考えをもたらした。1990年代からは世界女性会議で導入された「ジ

⁷ 神崎智子（2009）『戦後日本女性政策史－戦後民主化政策から男女共同参画社会基本法まで』明石書店 参考。

エンダー」の概念が、男女平等を目指すあらゆる分野の政策に取り入れられることになった。

以上のように、男女の平等は戦後からの女性政策によって、法律では整備されていった。石垣りんは女性の立場が変革していく中で、女性労働者として社会に身を投じ、一方で家庭を支える立場でもあった。制度的に変化していく女性の立場と、石垣りんが現実におかれている女性としての立場との差異は、石垣りんにとって詩を作る源になったのではないか。法律上では女性差別から解放され、女性が自由に生きることが可能になった世の中と、石垣りんは家族を支えるために働き、家庭の犠牲にならなければならなかった状況との矛盾を抱えながら詩を書いたのである。

第2章 教科書掲載作品についての考察

教科書掲載作品一覧

年	出版社	教科書	単元＞表題	作品
1982	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	挨拶—原爆の写真によせて
1985	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	挨拶—原爆の写真によせて
1988	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	挨拶—原爆の写真によせて
1981	三省堂	現国	①	崖
1983	三省堂	国Ⅱ	①	崖
1986	三省堂	国Ⅱ	①	崖
1989	三省堂	国Ⅱ	①	崖
1992	三省堂	国Ⅱ	①	崖
1996	三省堂	現文	現代詩	崖
2006	三省堂	国総	詩	崖
1990	大修館	現文	現代の詩	崖
1995	大修館	現文	詩歌	崖
1973	筑摩	現国	ことばの働き＞美しいことばとは	崖
1976	筑摩	現国	ことばの働き＞美しいことばとは	崖
1979	筑摩	現国	ことばの働き＞美しいことばとは	崖
1982	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	崖
1985	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	崖
1988	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	崖
2006	筑摩	国総	詩	崖
1998	桐原	国Ⅰ	詩	崖
2006	桐原	国総	詩	崖
1978	第一	現国	詩	感想
1981	第一	現国	詩	感想
1995	学図	現文	詩＞詩のころを読む	くらし
1982	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	くらし
1985	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	くらし
1988	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	くらし
1983	角川	国Ⅱ	人間を見つめて＞詩＞詩のころを読む	くらし
1983	角川	国Ⅱ	青春の叙情＞詩のころを読む	くらし
1986	角川	国Ⅱ	人間を見つめて＞詩＞詩のころを読む	くらし

1986	角川	国Ⅱ	青春の叙情＞詩のころを読む	くらし
1989	角川	国Ⅱ	人間を見つめて＞詩＞詩のころを読む	くらし
1989	角川	国Ⅱ	青春の叙情＞詩のころを読む	くらし
1992	角川	国Ⅱ	人間を見つめて＞詩＞詩のころを読む	くらし
1992	角川	国Ⅱ	青春の叙情＞詩のころを読む	くらし
1977	光村	現国	詩	子供
1994	日書	国Ⅰ	人間を見つめる(詩)	シジミ
1998	日書	国Ⅰ	人間を見つめる(詩)	シジミ
1998	日書	国Ⅰ	人間を見つめる(詩)	シジミ
1983	東書	国Ⅱ	詩	シジミ
1986	東書	国Ⅱ	詩	シジミ
1989	東書	国Ⅱ	詩	シジミ
1992	東書	国Ⅱ	詩	シジミ
1995	東書	現文	I 部＞詩歌	シジミ
1995	東書	国Ⅱ	現代文編＞詩歌	シジミ
1999	東書	国Ⅱ	現代文編＞詩歌	シジミ
1981	三省堂	現国	文学の方法	シジミ
1998	三省堂	国Ⅰ	現代文・表現編Ⅰ＞詩四編	シジミ
2006	三省堂	国総	詩をあじわう	シジミ
2006	三省堂	国総	現代文・表現編＞詩	シジミ
1995	大修館	国Ⅱ	現代文編＞詩	シジミ
1976	尚学	現国	詩	シジミ
1979	尚学	現国	詩	シジミ
1982	第一	国Ⅰ	詩の世界	シジミ
1985	第一	国Ⅰ	詩の世界	シジミ
1988	第一	国Ⅰ	詩の世界	シジミ
1991	第一	国Ⅰ	詩の世界	シジミ
1996	右文	現文	詩	0
1982	尚学	国Ⅰ	詩	空をかついで
1985	尚学	国Ⅰ	詩	空をかついで
1988	尚学	国Ⅰ	詩	空をかついで
1991	尚学	国Ⅰ	詩	空をかついで
1983	学図	国Ⅱ	詩・短歌	表札

1986	学図	国Ⅱ	詩・短歌	表札
1989	学図	国Ⅱ	詩	表札
1992	学図	国Ⅱ	詩	表札
1995	学図	国Ⅱ	詩	表札
1975	三省堂	現国	文学の方法	表札
1978	三省堂	現国	文学の方法	表札
1999	三省堂	国Ⅱ	現代文編＞詩	表札
2006	右文	現文	自己との出会い	表札
2007	筑摩	現文	詩・俳句	表札
2007	教出	現文	詩	表札
2006	桐原	国総	詩を味わう	表札
2006	明治	国総	詩を読む	表札
1977	東書	現国	詩	幻の花
1980	東書	現国	詩	幻の花
2007	桐原	現文	詩	幻の花
1995	明治	現文	後編＞近・現代の詩歌	用意
1999	明治	現文	前編＞詩	用意
2008	明治	現文	詩歌	用意
1982	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	略歴
1985	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	略歴
1988	筑摩	国Ⅰ	ことばと社会＞私の自叙伝	略歴
1983	教出	現文	随筆1（詩歌の心）＞詩を書くことと、 生きること	私の前にある鍋とお釜と燃える火と
1987	教出	現文	随筆1（詩歌の心）＞詩を書くことと、 生きること	私の前にある鍋とお釜と燃える火と
1992	教出	国Ⅱ	詩＞詩を書くことと、生きること	私の前にある鍋とお釜と燃える火と
1976	旺文社	現国	詩＞詩を書くことと、生きること	私の前にある鍋とお釜と燃える火と
1979	旺文社	現国	詩＞詩を書くことと、生きること	私の前にある鍋とお釜と燃える火と
1992	第一	国Ⅱ	現代文編・表現編＞詩を味わう	私の前にある鍋とお釜と燃える火と
1995	第一	国Ⅱ	現代文・表現編＞詩を味わう	私の前にある鍋とお釜と燃える火と

・阿武泉（2004）「戦後高等学校国語教科書データベース」

・文部科学省ホームページ「教科書目録」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/mokuroku.htm より抄録。

本章では過去から現在に至るまでの教科書において石垣りんの作品が多く取り上げられてきたことを概観したうえで、ジェンダーについての問題を学ぶための教材として今日の価値があると考えられる作品を取り上げて、それぞれの詩について考察していく。

第1節 「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」

「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」は、第一詩集『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』の表題にもなっている石垣りんの代表作の一つである。

台所で働く女性たちを描いた詩であり、家事を行うことと同様に愛情を持って社会に出ていこうとする姿勢を示し、女性の社会進出を世間に認識させようとする点で、当時革命的な詩であったことだろう。「私の前にある鍋とお釜と燃える火」は「私たち女」の前に長い間置かれてきたものであった。それは、母や祖母さらにその母たちへと劫初からうけつがれてきたという事実が長い歴史のなかで存在している。家事は女性が行うものであるという男女の役割分担が歴史的に作られてきたことは否定できない事実である。しかしこの詩では、女たちが家事を行うのは、強制されて行うものではなく、家族への愛情の表れとして行ってきたのであると表現している。私たち女の前には「いつも幾たりかのあたたかい膝や手が並んでいた。」つまり、女たちの子どもや夫やその他身内という愛情の対象が存在し、その人たちへの愛情がなければ、女たちは「いそいそと炊事など」をこんなに長い間繰り返すことはできなかったと述べている。

女性が行う炊事は家族への愛情ゆえに「無意識なまでに日常化した奉仕の姿」であった。女が炊事などを行うことが歴史的に続いたことにより、当たり前のこととして捉えられるようになり、無意識に日常化したということではなく、家族への深い愛情によって無意識に日常化し、自分の利害に関係なく家族に愛情を注ぎ、尽くしたのである。そのような考え方に基づくことによって、炊事などの労働が女性の役割として担われてきたことは決して不幸なことではないと女性に認識させたいという意図がこの詩から読める。女性の労働は社会的に低い地位にあり、政治や経済や文学に劣ると考えられ、女性自身も自分の労働に対して劣等感を持ちながら行ってきた。しかし、この詩によって、まずは女性の考えから覆すことによって、家庭に縛られながら生きてきた女性たちを解放しようとしたのではないだろうか。

そして、女性は今から社会に進出しても遅くはないと主張する。「私たちの前にあるものは／鍋とお釜と、燃える火と」の後に続くものは、「幾たりかのあたたかい膝や手」である。女性たちは家族への愛情の表れとして炊事を行い、家を支えてきた。同じように愛情を持って政治や経済や文学を勉強し、これからは家族のためだけではなく人間のために役立つ労働をしようというのである。「おごりや栄達のためでなく」とは、つまり今まで男性が社会的権力や地位を得るために労働をしてきたことを表していると考えられるが、女性は男性のように自分自身の地位を得るためでなく、今まで行ってきた炊事などの労働と同様に、

人間への愛情を持ち、利害に関係なく労働することの価値を述べた。男女の違いに関係なく、どのような労働においても社会的地位向上のためや私欲を満たすためだけの労働には価値はなく、人間のために行われる労働に価値を見出している。

石垣りんはこの詩を書いた経緯を「詩を書くことと、生きること」の中で次のように表現している。

「戦後、女性解放され、男女同権が唱えられ。結成された労働組合の仕事などもいたしましたが。世間的な地位を得ることだけが最高に幸福なのか、今迄の不当な差別は是非撤廃してもらわなければならないけれど。男たちのすでに得たものは、ほんとうに、すべてうらやむに足りるものなのか。女のして来たことは、そんなにつまらないことだったのか。という疑いをもち続けていたので、職場の組合新聞で女性特集号を出すから、と言われたとき、書いたのが次の詩でした。」⁸

この文章に表れている思いが「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」という詩に表れたのだろう。石垣りん自身社会で高い地位を得ることになんの意味も感じておらず、出世するための努力は何もしてこなかったと書いている。戦後、男女の平等がうたわれるようになり、働く女性の立場が確保されてきたのは確かである。しかし、これまで男性が得てきたような世間的な地位を得ることが必ずしも幸福とは言えない。その地位を得るためにどれほどの労働を重ね、家庭を犠牲にしてきたのか。本当の幸福とは何なのかを考えさせられる作品である。

今日の私たちの生活にこの詩を当てはめて考えてみたい。この詩が書かれた時代から変化した、女性の労働は家庭から社会へと移り変わり、多くの女性労働者が社会進出を果たしている。しかし、まだまだ多くの家庭において炊事などの労働は母親が行うものであるという性別役割分担が根強く残っているのではないだろうか。家事という労働の価値を見出したところで、本当に女性たちは救われるのか。本当の幸福を手に入れることは可能であるのか。私は今も歴史的な女性への固定観念が根強く残り、無意識のうちに受け継がれていく現実を見逃すことはできないと考える。

第2節 「崖」

太平洋戦争中に、アメリカ軍と日本軍の激戦が繰り広げられたサイパン島⁹を舞台に、女性たちの悲劇を描く作品である。アメリカ兵による投降勧告や説得に応じず、バンザイク

⁸ 石垣りん (1987) 『ユーモアの鎖国』「詩を書くことと、生きること」ちくま文庫 p.165 より抜粋。

⁹ 北マリアナ諸島の南部の島。アメリカ合衆国自治領。太平洋戦争中 1944 年 6 月 15 日アメリカ軍上陸から、7 月 9 日アメリカ軍のサイパン島占領声明までの約 1 か月間続いた、サイパン島の戦いの舞台。多くの日本人兵士や一般市民が断崖から飛び降り自決した。サイパン島の戦いで日本軍はほとんどが戦死、戦火に倒れた市民は 1 万人を越えたとみられている。児島襄 (1966) 『太平洋戦争 (下)』中公新書 pp.174・222 参考。

リフと呼ばれる断崖絶壁から日本兵や民間人が「天皇陛下、万歳」と叫びながら身を投じて自決した史実は、現在でも映像として残るほど衝撃的な出来事であった。

この詩は戦争の犠牲になって死んでいった女性と戦後の現代に生きる女性とを関連づけて考えることのできる詩である。

女たちは「美德やら義理やら体裁やら何やら。火だの男だのに迫いつめられて。」崖に身を投げた。この時代は自ら天皇のために命をささげ、敵の捕虜になるくらいなら自殺したほうが良いとする美德。天皇の命令は絶対守らなければならないものであるという義理。実際に「万歳突撃」という日本軍兵士による玉砕覚悟の突撃が行われた。そして世間的にみて、当時の美德や義理に反した行動はできないという体裁。「火」は戦火であり、「男」が表すものは日本人兵士たちを含め、その頂点に立つ天皇の存在であろう。このように女性たちは多くの権力や社会的体裁などに身を追われて、選択肢を失い、死ぬしか行き場がなくなってしまった。同様に戦後の社会にも美德・義理・体裁が存在し、女性たちは強大な権力にあらがうことができないために、社会から身を引かなければならない状況が多くあったに違いない。詩の中で『(崖はいつも女をまっさかさまにする)』と表現しているように、現在も過去も未来も崖はいつも女を苦しめる。この詩の「崖」は、サイパン島のバンザイクリフであることに加えて、窮地のようなぎりぎりの状況を示し、女性は窮地に立たされたとき、自分の身を犠牲にするしかないことを表す。過去にさかのぼると、『平家物語』¹⁰に描かれる壇ノ浦の戦いで、源氏軍と平氏軍の合戦のなか、平氏が壊滅状態になり、平氏の敗北を悟った平氏一門の女性たちは次々に海の中に身を投じたという。武士という男性社会の権力争いに巻き込まれ、死んでいった女性たちはサイパン島のバンザイクリフの女性たちと同じ状況にあったといえる。戦後では、女性の進学率が高まり、女性労働者が増加することになった。しかし、企業にとって女性が長く社会に残ることを必要としていなかったため、女性の早期退職制度¹¹なるものが存在し、女性は結婚して家庭を持つと仕事をやめなければならないという状況に立たされていた。戦中の「天皇」に象徴される、絶対的権力がその後の社会にも存在していたのである。

最後の第4連では「それがねえ」という日常会話の中に含まれる口調から始まり、噂話をするかのような言葉から入ることによって、読み手の意識を最後の言葉に向ける効果がある。「まだ一人も海にとどかないのだ」戦争というものの犠牲になった女の死が無意味なものであるということ、海という救いの地にも届くことができない女の無念さを表し、戦争から15年の時が過ぎてもなお、女性たちの立場は変わってはいないという語り手の主張がみられる。

大きな権力や絶対的な権力は今日の社会にも存在しているのではないだろうか。人々は

¹⁰ 富倉徳次郎(1975)『鑑賞 日本古典文学 第19巻 平家物語』杉本圭三郎「平家物語に現れた女性」pp.440-448 参考。

¹¹ 神崎智子(2009)『戦後日本女性政策史—戦後民主化政策から男女共同参画社会基本法まで』明石書店 pp.209-210

その権力に逆らうことができず、問題を抱えている。権力の中に統治されている人間もそのことに気付かず、自分が犠牲になることに何の疑問を抱かない。戦中で天皇のためなら身をささげることがをいとわず、むしろ天皇のために死ぬことができ万歳というような考え方と同様である。昔から重視されてきた美德やら義理やら体裁やらに意味があるのか、それは大きな権力が都合のいいように作ってきたものではないだろうか。そのようなものを鵜呑みにしてしまうことの危機感を伝え、生きていくうえで私たちが正しい選択ができる環境にあるのか、という問題意識を抱かせる詩である。

第3節 「シジミ」

第2詩集『表札など』に収録された詩である。短い詩ではあるが、かなり刺激的な詩であり、人間が生きていくためには他の命を食べなければならないという命の孤独感を感じる。

シジミとは私たちの生活にあふれた食材の一つであるが、この詩の中の「シジミ」は何か別の意味を持っているようにも感じられる。伊藤信吉は次のように述べている。

「私のシジミ連想は味噌汁くらいのもの、平凡だ。そのシジミは鍋釜の台所にもあったにちがいないが、冬のひとり寝の台所におかれたこの詩の貝は、もはや鍋釜の熱い味噌汁とは別だ。その貝の小ささは凝縮したいのちの何かを象徴している。それは石垣りんの生の寂寥感の寓意的化身に他ならぬだろう。」¹²

ひとり寝の夜に同じ家の中に生きたものが存在する。静まり返った家の中で、生きたシジミの立てる音に夜中目をさます。しかし、夜中に生きていたシジミも朝になれば料理されて、「私」が食べてしまう。「寝るよりほかに私の夜はなかつた。」つまり、生きたシジミを逃がすこともできず、ただシジミを食する朝を待つしかない。その孤独感を詠っているのである。

「夜が明けたら／ドレモコレモ／ミンナクツテヤル／」と笑う鬼ババはよく昔話に出てくる存在であり、山の中に来た者を襲って食べるという山姥など恐ろしい存在であることは知られていることである。ここで注目したいのはなぜ途中でカタカナ表記に変わったのか。それは「私」が言おうとしていることが鬼ババと同じであることを「私」が認識してしまったからである。恐ろしい鬼ババと同じように「私」は生きたものを食べ続けなければならない。「鬼ババの笑いを／私は笑った。」と描いたのは、人間を食べることによって生き続けている鬼ババのような恐ろしい存在と同じく、人間も生きる物を食べなければ生きることができない存在であることに気付き、嘲笑しているようである。しかし、そのことに気付いたところで何をするわけではなく、眠りについて明日を迎え、「シジミ」を食べなければならない、どうしようもできない孤独感を表している。

¹² 小田啓之『現代詩手帖特集版 石垣りん』(2005)思潮社 伊藤信吉「作品鑑賞として—『表札など』」p.200より抜粋。

「うっすら口をあけて」寝る「私」は、「台所のすみで／口をあけて」明日食べられるとも知らずに生きている「シジミ」と同じように表現されている。人間に食べられる弱者としての「シジミ」と変わらない「私」の行動が表す意味は、「私」も「シジミ」と同じように人間社会に生きる弱者であり、社会の権力や強いものの犠牲になる存在であるということを示しているのではないだろうか。

この詩は人間が生きていくということが他の生命の犠牲の上に成り立っているということを認識させる。さらに、人間も人間の犠牲の上に立って生きているということを考えさせられるのである。

第3章 「表札」

本章では「表札」を例に挙げ、昭和49年に提案された学習課題と現在の教科書の学習の手引きにみられる学習課題を比較し、課題の特徴や傾向がどのように変化したかを考察する。一つ一つの課題について細かく考察していくことで、その特徴を明らかにする。

第1節 教材観

第2詩集『表札など』に収録されている詩である。第1詩集『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』が出版されてから10年ほどの月日が経った頃に作られた作品で、その表題詩である「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」の意志を受け継いだ作品が「表札」である。

この詩の中で「表札」は、玄関などにかけているようなモノとしての表札がまず表現されている。病室の名札や招待された席には様や殿といった敬称がつけられる。それは自分が意図してつけたものではなく他人につけられたもので、拒むことができないものである。そして「精神の在り場所」を示す「表札」にも、同じことが言える。たとえば、私の経験では女の子だからピンクが好きというのに違和感を覚えたことがある。女の子だからといって必ずしもピンクが好きなのではない。しかし幼稚園のときの帽子は男の子が青で女の子はピンクとすでに決められていて、拒むことはできなかった。しかし、この詩は自分の好みは自分で決めようとする姿勢、つまり自分の生きていくところは自分で決めるという決意を表明している。私たちの周りに存在する物質的な「表札」を例に出し、精神的な「表札」について考えさせる詩である。

「他人が付けてくれる表札は／いつもろくなことがない。」と詩の中で表現しているように、詩の語り手にそのような経験があったのではないかと思われる。作者はこの詩を書いた背景について、自分をとりまく生活の中で野党の勧誘や宗教の脅迫めいた勧誘があり、そのことが詩を書いた気持ちの下敷きにあったと書いている¹³。支持する政党や宗教は選択する自由があり、他人に押し付けられるものであってはならない。このような作者の置かれた状況と生活のどこにでもある表札とが結びついてできた詩が「表札」である。

作者の石垣りん自身には「生活詩人」という肩書きがつけられていた。一日中働きながら生活費を稼ぎ、その傍らで詩を書いたという作者の生きる現実から、詩に生活感がにじみ出ている。それは本人が意図しないところで読み手が感じるものであり、「生活詩人」という肩書きも他人によってつけられたものである。石垣りん自身は自分の詩にこのような肩書きがつくのは、「ハンディキャップ」のようなものととらえていた¹⁴。子どもが書いた絵に「子どもの絵」という説明が付き、観察者に断りを入れることで、絵に対する評価も子どもに向けた評価になる。同じように、作者は詩以外にほかの仕事で生計を立てながら

¹³ 石垣りん (1987) 『ユーモアの鎖国』「立場のある詩」 pp.192-193 参考。

¹⁴ 石垣りん (1987) 『ユーモアの鎖国』「立場のある詩」 p.189 参考。

書いている詩人であるため、そのような視点で詩をみましょうという断りを示していると考えていたようだ。しかし、詩を書くこと以外の労働に従事した日常生活の中から書いた詩であるという視点に限定されてしまうと、詩の持つ意味が狭くなってしまう可能性があるように感じていたのではないだろうか。その気持ちを「表札」という詩によって、批判的に表現しているようにも感じられる。

石垣りんは次のような問題意識を示している。

「戦後、いろんな呼び名が変更されました。芸人が芸術家になり、文士が作家になり、大工が建築士になり、女中がお手伝いになる、といったことを、私はつまらないことだと考えました。名前を変えてどうする、その仕事に自信と誇りを持つことのほうが先ではないか、と。女中が女中と言われるままで十分立派に扱ってもらえるような世の中にしたいほうがいい」¹⁵

例の一つとして挙げられている「女中」は宮中などに奉公している女性。また、一般の家に雇われて下働きなどをする女性。下女。現在では、接客係またはお手伝いさんという¹⁶。「女中」から「お手伝い」に呼び名が変化したからといって、実際に女性が行う仕事が変わるわけではない。戦前の日本では身分制度が確立されており、女中として働く女性と奉公先との関係は主従関係にあったと考えられる。その性格は名前を変えただけでは変わることはないのである。そこで筆者はそのままの名前でも、その仕事を持つ意味や必要性を尊重し、今まで行ってきた女性の仕事はつまらないものではないという意識を持つことが重要であると述べている。他人からつけられた呼び名や職業観に左右されず、自分自身の職業に意味を見出すことが重要である。自己の存在意義は他人に決定されることなく、自分は自分であってよいという人間の精神の在り方を示す「表札」の詩の思想とつながる。

この詩は性別を問わず、当時の社会を生きた人々から共感を得た作品であったと思われる。書かれた当時戦後日本の高度経済成長に身を注いだ多くの肩書きを持たない人々に受け入れられたからである。権力や肩書きを持たない人々にとってこの詩は、自分自身の生き方を示してくれているように感じたのであろう。作者の石垣りんも、戦後社会を生きてきた女性である。女性として社会で働き、家族を養っていかなければならなかった状況から解放され、自分の精神の在り場所を表現したものが「表札」である。女性という社会的に権力を持たず、社会の大きな権力に従いながら生きてきたものの解放を主張した作品として読むことができる。

〈詩の構造〉

第一連・・・語り手の主張。

第二連・・・第一連と逆の言い回しで同じことを主張し、次の連につなげる。

¹⁵ 石垣りん (1987) 『ユーモアの鎖国』「領分のない人たち」 p.150 より抜粋。

¹⁶ 小学館国語辞典編集部 (1972) 『日本国語大辞典 第二版 第七巻』小学館 pp.380・381 より抄録。

第三連、第四連・・・第二連をうけて、「他人がかけてくれる表札」の具体例を示す。

第五連・・・例から「他人がかけてくれる表札」はかけてはいけないことを表す。

第六連・・・第一連の繰り返し。

第七連・・・最も主張したい内容。精神の在り場所を示す表札について。

第2節 昭和49年に提案された学習課題¹⁷の考察

本節では小海氏が考える「表札」の授業を検討する。以下では小海氏が提案する目標と学習活動の課題1から課題8を示し、それぞれの課題について〈考察〉として私の意見を述べる形をとっている。

目標

1 作品を読み味わって、その主題（中心思想）をとらえる。

この詩ではその性格から見て、中心思想をとらえるのがまず第一の目標になる。

2 表現上の特色をとらえて、この詩の詩法を理解する。

一見素直で、特別な詩的技法の用いられていない詩のように見えるが、実はそうではない。

3 人間の主体的な生き方の必要性について考える。

この詩が持つ内容価値と結びついた目標である。

学習活動

この詩を読んで得た様々な感想を話し合わせた上で、内容の探求に入ることになる。考えられる課題は次の通りである。

課題1 この詩の中で、作者が言おうとしていることを特に端的に示している連をあげてみよう。

第一連、第六連、第七連。第二連は第一連の内容を逆の形で言ったものであり、第三連、第四連は、〈他人がかけてくれる表札〉の具体例であり、第五連は、第一連、第六連と同じことを、寓喩的に言ったものである。

〈考察〉

連と連との関係性を把握し、それぞれの連の働きを捉え、詩の構造を把握させる。「表札」を考えさせる上で重要となる連に注目させ、今後の課題につなげる課題である。目標1で主題をとらえることを第一の目標として考えられた課題であるため、作者の主張を読み解いていく出発点にこの課題を設定したと考えられる。それぞれの連を読めばすぐに解答で

¹⁷ 増淵恒吉・三谷栄一・小海永二・新田大作編（1974）『高等学校 国語科教育研究講座 第二巻 現代国語（1） 詩・短歌・俳句』有精堂出版 小海永二「石垣りん 表札」 pp.156-159 より抜粋。

きる課題である。

課題2 〈自分の住むところには／自分で表札を出すにかぎる〉とあるが、これはどんな意味のことを言った表現か。

「自分のことは自分で決めるに限る」という意味で、主体的な判断や行動に従うのが最上だということを言った表現。

〈考察〉

課題1で取りあげられた第一連について考えさせることにより、詩の主題にせまる連の意味を読み取る課題である。ただ自分の住むところにかけている物質的な「表札」について表現しているのではなく、「表札」によって作者は何を表したかったのかを考えなければならない。詩全体の意味を捉え、語り手の主張を読み取る必要がある課題である。詩の中心思想を読み取る目標を達成するための課題といえる。

課題3 第三連・第四連は〈他人がかけてくれる表札〉の例を言ったものだが、これらの連の表現にはどのような寓喩がこめられているか。

いろいろな答えが出てくるだろうが、これらはいずれも〈いつもろくなことはない〉の「ろくでもないこと」の部類に入るものであって、要するに、おだてにのせられたり、強権に屈したりして一度自分の自由を他人の手にゆずり渡してしまうと、最後には不幸な結果に陥ることが寓喩されている。第四連の最後にある〈そのとき私がこぼめるか?〉という反語的表現の意味の重さにも、気づかせたい。なお、この課題を発展させて、〈他人がかけてくれる表札〉の具体的な実例を、生徒たちの身近な体験の中からあげさせると益々よい。戦前、軍国主義に国民が自由をゆずり渡した結果としての悲惨な戦争とそれに続く敗戦、あるいは日本の繁栄のためという理由で政府の高度経済成長政策に協力し、せっせと働いた挙句の公害や環境破壊なども、その実例にあたるだろう。

〈考察〉

第三連・第四連は第二連を受けて、私たちの生活の中にあるものによって、〈他人がかけてくれる表札〉の具体例を示したものである。この二つの具体例にどのような意味が込められているかを考えることにより、課題2と同様この詩の主題にせまっていくと同時に、目標2に掲げられている詩的技法を学ばせる。日常生活に溢れたものを寓喩として表現することで、読み手にとって説得力のある詩を作った作者の巧みな技法を学び、学習者の表現活動に活用することができると考えられる。

発展課題として示されているように、学習者の生活や知っている事実から考えられる例を挙げさせることによって、詩と自分自身の経験や知識を結びつけて考えることができる。より深く詩を読み取ることが可能となり、詩に表現されている教訓を学習者の現実の生活に投影させることができる可能性のある課題である。さまざまな例が挙げられることが考えられるので、学習者同士でお互いの意見を交流し、新しい発見ができる。解答例では、

戦前や高度経済成長期における例が示されていることから、この課題が作られた時代を反映している解答例であり、今現在の学習者が考える具体例は今の時代を反映するものになるはずである。服屋の店員に似合うといわれて買った服が、家に帰ってもう一度鏡を見たら、やっぱり似合わず苦い思いをしたという経験など、学習者の身近にある事柄で様々な意見が出ることが予想される。

課題 4 最後の連に〈精神の在り方も／ハタから表札をかけられてはならない〉とあるが、この連に来て〈精神の在り方も〉という言い方をしたのはなぜか。

前の連までは暗示的・寓喩的な書き方をしているので、ここに来て、自分の意のあるところをはっきりとうち出そうとしたのである。つまり、自分が本当に考えていることを、最後で直接的にズバリと出すことによって、読者になるほどと納得させる書き方なのである。

〈考察〉

詩の書かれ方に注目した課題である。語り手は自分の最も主張したい内容を最後の連で表現することにより、読み手に納得させ、共感を得られることを意図している。学習者はこのような表現方法を学ぶことにより、自ら文章を表現するときや、何かを主張するとき役に立てることができると考えられる。ただ、納得させることに成功していればの話であり、ここで学習者から精神の在り方に話を持っていくには無理があるなどといった反対の意見が出れば、議論ができると考えられる。しかし、提案者は反対の意見ができることは想定していないと考えられる。

課題 5 この詩の〈表札〉は何を暗喩しているか。

自分自身のこと。この暗喩がこの詩では実に巧みに効果をあげている。この詩の重要な詩的技法の一つである。

〈考察〉

暗喩という詩の表現技法が効果的に使われていることを学ぶことで、「表札」に隠された意味に気づき、詩の表現の面白さを味わうことができる。そして課題 3・4 と同様、詩に見られる表現の工夫を学習者自身が活用することに役立つであろう。それ以上に、詩の題である「表札」の意味を考えることは、この詩を理解する上で重要である。表札という日常にあふれたものに例えて、語り手は何を表現したかったのかを考えさせる。課題提案者である小海氏は「表札」=自分自身であると読んでいるが、学習者はどう読みとるだろうか。自分の居場所や自分の生き方など、多様な表現ができるのではないだろうか。日常にあふれる具体的なものを抽象的な思想と連想させて考えるきっかけになる課題である。

課題 6 この詩の中で第三連・第四連の部分が果たしている役割を考えてみよ。

これらは〈他人がかけてくれる表札〉の具体例にあたるが、「ろくでもないこと」の事例として極めて効果的で、読者になるほどと思わせる効果がある。と同時に、ここには何と

なくユーモラスな感じがあって、この詩の論理の骨組にイメージによるふくらみをも与えている。試みにこの二連分と、それらの内容的連関から次の第五連をも合わせて、取り外してしまったとしたら、主題はそれでも変わらず、作者の言おうとすることは通じるけれども、詩としては極めてやせたつまらないものになってしまう。これらの連の存在することで、この詩は詩として生きたもの、すぐれたものになっているのである。

〈考察〉

課題3では、これら二つの連の具体例が何を表しているかを考え、語り手の表現に寄り添って、詩の意味を考えた。この課題では、さらに発展させて、詩を俯瞰して見て、学習者に考えさせる課題である。語り手はなぜ第三連・第四連でみられるような例を詩に示したのか、語り手の意図を読み取り、その意図が二つの連によって読み手に伝わり、効果を上げているかを考える。学習者の中から「この二つの連がなくても、語り手の主張が書かれているため、役割はない」という意見や「この詩を読み手に理解させるために、もっとふさわしい具体例があるのではないか」などの詩の表現に対して批判的にみる意見が出てくることが期待したい問いである。多様な意見が学習者から出たあとで、解答例のように、この二つの連がなくなってしまうらどのような詩になるかを考えたり、学習者同士で議論したりする中で答えが見えてくるだろう。

課題7 この詩の口調からどんな感じを受けるか。またその感じは、この詩のどのような表現上の特色から生まれてきていると思うか。

簡潔で歯切れよい感じを受ける。その感じは、各連の短さ、また短めの文をぼつぼつ切っ出しているその出し方、各連の最後のことばが、〈かぎる〉〈ない〉〈付いた〉〈こぼめるか?〉〈いけない〉〈限る〉〈よい〉と、適当な変化を持ちながらも平易単純な単語を使って短く言い切ったり問いかけたりしている点など、から来る。これらの表現上の特色は、詩人の内部の呼吸に相応じているものだが、広く言えばやはり詩的技法の一種で、詩人のことばの使い方の身についた巧みさ、語感の鋭さ、言語的配慮の行きとどいた完璧さ、などを強く実感させられる。

〈考察〉

解答例として挙げられているものは、詩人の巧みな詩的技法を捉えたものである。詩の口調から受ける印象が読み手にとってどのような効果を挙げているのだろうか。「簡潔で歯切れよい」という印象から、作者に戸惑いがなく、言いたいことを強く主張することによって、読み手を詩に引き込み、説得力のある詩になっている。このように、語り手と読み手の対話によって詩が成立していることに目を向けさせたい。さらにこの課題から、語り手の人物像ひいては作者石垣りんの人物像について詩の本文から考えさせることができるのではないか。人物像を捉えるには、この詩の口調だけに注目するだけでは十分ではないかもしれないが、この詩全体から作者が社会的にどのような立場に置かれた人間か、また社会に対してどのような考えを持っている人間であるかなどを読み取ることが可能である。

課題 8 この詩を読んで、主体的な生き方の必要性について考えてみよう。

目標の「3」をそのまま学習課題としたもので、この課題で、この詩の中心思想を生徒各人に最終的に確認させたい。

その上で、各人それぞれに自分自身の生き方の問題として、主体的な生き方がどんなに大切かということを実感させるよう、話し合いなどを通じて、導いてゆきたい。

〈考察〉

この課題には、「表札」という詩を学習者一人ひとりのものにし、学習者にとって「主体的な生き方」が必要なかを問うことによって、学習者に「表札」という詩を評価させる課題である。この詩の主題を「主体的な生き方の必要性」であると読んだうえで、解くことができる課題であろう。主体的な生き方の必要性を問う課題であるので、学習者は詩から読み取った問題意識を自己の問題として認識することができる。しかし、「主体的な生き方がどんなに大切かを実感させる」ように授業が導かれていくと、作者が主張する生き方が読み手の生き方の前提に立ってしまい、道徳的な授業で終わってしまう可能性がある。また、主体的に生きること賛成しない生徒がいた場合、その意見を無視してしまうことになり得る。「主体性を重要とする語り手の思想をあなたはどのように評価するか。」という語り手に目を向け、学習者が詩を評価する立場に立つことで、学習者一人ひとりの「表札」の価値を見出すことができるのではないだろうか。人間は、他者によって認識され他者と比較することによって自らの存在を認識することができるが故に、自己の主体性も重要であるが、主体的に生きていくだけでは生きていくことができない。といった、語り手の「表札論」を批判する意見が出ることも考えられるだろう。

第3節 現在の学習課題の考察

現在使われている教科書の学習の手引きより、教科書がどのような授業を想定し、教材から何を学ばせたいかを読み取る。「表札」を教材として取り上げている教科書会社の中から、右文書院の教科書を取り上げた。他の教科書会社によく見られる、一つ一つの表現を読解する課題ばかりでないことに注目したためである。

右文書院「現代文」(平成15年)

单元名 自己との出会い

[言語学習教材]

《主な学習目標》

- ・この詩のそれぞれの場面を自分なりにイメージしながら、それらに応じた発声の仕方を工夫して朗読する。
- ・作者の生き方・考え方などが表されていると思われる詩句を本文から読み取って抜き出

し、それらについてクラスで話し合うとともに、それを要約してまとめたものを発表する。

- ・話し合いの過程で自分が特に注目した詩句を取り上げて、注目した理由とともにこの詩の鑑賞文を書く。

- ・<課題>次の課題を行ってみよう。

●表現の学習

①連や意味の切れ目に注意しながら、それぞれの場面に応じた発声の仕方を工夫して朗読する。

留意事項 作者の心情が、聴き手に伝わるような工夫を心がける。

<考察>

留意事項にもあるように、作者の心情を詩から読み取ることが必要とされる問いである。詩を朗読するという課題は詩の単元においてよく目にする。この課題ではただ詩を読むのではなく、意味を理解しながら読まなければならない。それぞれの場面に応じた発声の仕方を工夫するという読み方は、学習者がそれぞれに読み取った「表札」の場面が言葉によって表現され、様々な発声の仕方が出てくるのではないと思われる。詩に表現される一つ一つの言葉の意味を理解するだけでなく、その表現から作者のどのような心情が読み取れるか、怒っているのか、悲しんでいるのか、などを朗読によって表現しなければならない。朗読することによって、文末表現に見られるきっぱりとした物言いにも気付くことができるだろう。朗読によって作者が強く主張していることに注目し、作者の人物像も読み取ることも可能ではないかと思われる課題である。

②この詩から読み取れる作者の生き方・考え方などを表現したと考えられる詩句を抜き出してクラスで発表する。さらに、それらについてクラスで話し合い、それらを要約してまとめる。

留意事項 インターネットなどを利用して作者や作品について調べたことも参考にする。

<考察>

インターネットによる情報収集を参考にする点が現代的だと思われる課題である。生徒たちがインターネットの情報を鵜呑みにしてしまう危険性はないのかということが問題としてあげられる。詩からの情報だけを根拠に作者の生き方、考え方を推論する問いならば、学習者それぞれの多様な読みが出てくる問いであろう。なぜその詩句に注目し、どのような点が作者の生き方を表しているのかなどをクラスで話し合うことによって、詩の読みが深まることが予想される。しかし、この課題はインターネットなどの情報を利用し、参考にするように留意事項に示されている。インターネット上には、作者についての紹介や作品について解釈されているものが多く提示されるであろう。その中には、詩の読みに偏りのあるものや、根拠のない作者像が示されているかもしれない。学習者はどの情報が信頼に足るものなのかを見極め、参考にできる資料を活用することが求められる。

さらに、クラスで発表し、話し合ったことを要約してまとめる力が求められている。なぜ自分がその詩句を選んだのかを他の生徒に伝える力が必要とされ、さらに意見に対して話し合う力も必要とされる。抜き出した詩句が一樣でなければ、話し合いが活発に行われると予想される。話し合いにより、自分の読みと他の生徒の読みを比較し、類似点や相違点を発見することができるだろう。その結果として、もう一度抜き出した詩句について学習者自身が考え、修正して要約することが求められる。

<課題>次の課題を行ってみよう。

クラスで話し合った詩句の中で、自分が特に注目した詩句を中心に、この詩の鑑賞文を書いてみよう。

〈考察〉

詩教材では感想文・鑑賞文を書く課題が多くあり、その多くは学習の最後に用いられることが多い。初発の感想から、詩についてクラスで話し合った結果、また自分で考察した結果、どのように詩に対する感想が変化したかを問われるべきである。表現学習 2 をもとに鑑賞文を書くことによって、学習者の詩に対する読みは変化したと考えられ、それを自由に書くことができる課題である。そのため、学習者の多様な読みを引き出すことができる課題であるが、この教材の単元名である「自己との出会い」というところまで読みを深めることができるのかが疑問である。「表札」に書かれている「自分のことは自分で決めなければならない」という主張を学習者は読み取り、さらに自分の生き方について考え直すことが「自己との出会い」となるであろう。「表札」の読みを深め、自分の問題として考えることができるかは、クラスでの話し合いでどこまで議論を深めることができるかだと考えられる。

第 4 節 過去と現在における学習課題の比較と考察

昭和 49 年に提案された学習課題の特徴として、詩の技法に注目する課題が 8 問中 5 問あった。その間いの中には表現技法を考えるだけの問いばかりではないが、これほど多く表現についての課題があるということは、この時代に詩教材を読むことの意味として、表現技法を学ばせることに重点を置いていたのではないかと考えられる。課題 6 では、表現技法を考えた上で、その表現に作者が込めた意図やその表現によって読み手にどのような影響を与えるかといった表現の役割について問うているが、表現について学習者が評価するような問いは見られなかった。現在の授業においても、そのような課題は見られないだろう。

課題 3 の発展課題のような詩の中に見られる具体例と自分の経験や知識を結び付けて考える課題は、現代の学習の手引きにおいては見られなかった。このような課題を設けることで、詩の意味を自分自身に近付けて理解するために効果的な課題であると考えられる。

特に「表札」では、日常の具体的な事例によって精神という抽象的な問題を表現しているため、学習者に身近な例を挙げさせることは、「表札」を理解するために特に有効であろう。

特に注目したい課題は課題 8 である。作者が主張したことに対して、読み手が評価する問いである。この問いを作者の考え方に学習者を導いていく問いにするのではなく、学習者が本当に作者の主張に賛成しているかを問うことができれば、詩教材によって、自らの生き方を考える問いになるであろう。現在の課題としても活用できる問いである。

過去の課題全体を通して、問いの答えとして期待させるものが、作者の考え方に沿ったものであったことが読み取れた。課題 8 のような、詩に対して批判的に意見を述べるような課題が増えていけば、詩を読む授業が変わってくるのではないかと感じられた。

現在の教科書学習課題にみられる特徴として、他社の学習の手引きでは、詩の内容に沿って表現一つ一つの意味を問う課題や、作者が詩を表現した理由を問う課題が多かった。課題に取り上げられる表現は教科書会社によって多少異なっていたが、課題の提案者が重要な表現であると認識している表現に注目させていると考えられる。課題が示された時点で、学習者はこの表現が重要であると、認識させられてしまう。しかし、例に挙げた右文書院が他社と違った点は、どの詩句に注目するかは生徒自身で決め、自由にクラスで話し合うことができる点である。それ故に、詩の一つ一つの表現を深く読むことは難しいかもしれないが、生徒たちから多様な読みが出てくる可能性のある課題と考えられる。石垣りんという誰もが知っている詩人だからこそ、石垣りんを知っている大人たちの先入観を持った読みから解放されて、「表札」という詩に初めて出会った生徒たちの新鮮な読みを期待することができる。昭和 49 年に作られた課題を見てみると、提案者の読みが反映されている問いが多くみられ、その読みに学習者が偏ってしまうことも考えられる。つまり、授業者は生徒から多様な読みが出るような課題設定が必要であり、その課題から考えられる生徒の反応を予測しておく必要がある。

詩の授業で多くみられる学習の一つに、朗読や暗唱する課題が挙げられる。例に挙げた現在の学習の手引きの中でも①の課題にみられる。過去の課題では朗読する活動はみられなかったが、課題 7 で詩の口調から得られる印象を問う課題がみられた。現在の詩の授業では朗読することが重要になっているのかもしれない。実際に声に出して「表札」を読むことで、言葉の終わり方の特徴を直感的に感じ取ることができ、そこから作者の人物像を考えるきっかけになると考えられる。感想文や鑑賞文を書く課題も多い。表現一つ一つを詳細に読み解く課題より、現在の学習課題では詩について自由に考えさせる課題が増えて来たのではないだろうか。詩を鑑賞し、詩の表現の良さや感動を味わうことを詩教材の価値とし、朗読することや鑑賞文を書くことに重点が置かれている。

第4章 現在の教科書課題にみられる特徴と傾向

第3章では「表札」を例に、昭和49年に提案された学習課題と現在使用されている教科書における学習の課題を比較し、現在の教科書における特徴を考察した。本章では、「表札」以外の作品を扱った教科書の学習の手引きにおいても同じ特徴が見えてくるのか。または、異なる特徴があるのかを考える。「崖」や「シジミ」を例に課題の特徴と傾向を検討し、現在の学習課題の問題点を見出していく。

第1節 「崖」

筑摩書房「精選 国語総合 現代文編 改訂版」(平成18年)

- ・問「まだ一人も海にとどかないのだ。」とはどういうことか。

〈考察〉

戦中にいろんなものに追いつめられてサイパン島の崖から飛び降りた女たちが、15年の年月が経っても誰ひとりとして海に届かないとは、国や名誉のために海に飛び込むという行き場を選んだにも関わらず、その死は何の意味も成さなかったという意味が込められている。結局日本は敗戦し、女たちの選んだ死は無意味だったのである。天皇を頂点とした男たちに象徴される権力に逆らうことができずに、犠牲になった女たちが太平洋戦争中に存在した事実を読み取ることができる。また、この課題の発展として戦後15年経っても戦中と女性が決めた犠牲になるということが起こっているのではないかという学習者の問題意識を引き出したい課題である。

- ・「崖」について、多用される行替えや、括弧にくくられた部分の効果を説明してみよう。

〈考察〉

詩の表現技法に注目する課題である。「崖」の特徴の一つとして注目されるのが、()で括られた一行の存在であり、そこには語り手が主張したいことが表現されている。そこまでは、戦争中サイパン島で起こった事実が書かれていて、過去の事実と15年経った今とを結び付けているのが括弧で括られた部分である。「いつも」という言葉に表されているように、過去も現在も女たちは男たちの犠牲にならなければならない現実を表現している。括弧で括ることにより、読み手に注目させる効果と、声を大にしていうことができない語り手の心の中の声を示していると解釈できる。

多用される行替えについて問う課題は筑摩書房にだけ見られる課題であった。他の教科書会社では詩のリズムに注意して朗読する課題が見られた。一行が短いことにより、読むときのリズムは淡々としたものになるだろう。簡潔で無駄のないまとめられた文章からは、作者の主張がはっきりと読み手に伝わる効果があるのではないか。最後の2行が「あの、／女。」と行を替えて表現されている意味を考えてみる。まとめて「あの女」と表現したと

きの違いと比較して考えてみると、行替えしていない方の女はサンパン島で見られた女のこと限定されてしまうような気がする。2行に分けることで、サイパン島の女を含め、過去から現在に至るまでの女性全体を表現にはしようとしたのではないだろうか。

この課題から、「崖」にみられる問題意識が過去から現在に続くものであると学習者は認識することができると考えられる。

2つの課題を考えることで、過去を含めた現在の女性の立場を考えることが可能である。しかし、「崖」を現在の生徒たちの問題として考えるには、それぞれの問題を発展させて考える必要がある。今私たちが生きている社会に詩で書かれていることと同じ状況が存在しないか、変化したところはないかなど、学習者の身近なところでこの詩を考えさせる必要があるだろう。

第2節 「シジミ」

三省堂「新編 国語総合 改訂版」(平成18年)

・次の詩句を手がかりにして、「私」の思いについて考えてみよう。

①夜が明けたら／ドレモコレモ／ミンナクツテヤル

②鬼ババの笑い

③それから先は／うつすら口をあけて／寝るよりほかに私の夜はなかつた

〈考察〉

①まずこの言葉は誰の言葉なのかを考えると、これは私の言葉である。そして、私の言葉がどうして途中からカタカナ表記になったのかを考えると、鬼ババが言った言葉と同じことを「私」が認識したからである。つまり言葉によって、「私」は鬼ババと同じように命あるものを食べて生きていることを認識したと読めることができる。

②自分は鬼ババと変わらぬ存在だと気づいた「私」は鬼ババの恐ろしい笑いを嘲笑したのである。結局は他の命の恩恵を受けなければ生きていくことができない存在であることを鬼ババに対しても自分に対しても笑ったのではないかと思われる。

③この表現からは、生きるということの意味に気づいてしまった「私」だが、どうすることもできない孤独感を読み取ることができる。寝て朝になれば、いつもようにシジミの命をとって食べることになるのである。

この課題は①②③を個々の表現として読み取るのではなく、それぞれの表現を結びつけて詩全体から読み取れる「私」の思いを把握することが重要である。

この課題は「私」の思いに注目するものであったが、「シジミ」や「鬼ババ」が登場する意味も考えるべきである。

・それぞれの詩のリズム・ことばの響き・内容に注意して読み方を工夫し、朗読してみよ

う。

〈考察〉

「表札」の学習課題にも見られた朗読である。三省堂の教科書学習課題には定番の課題のようだ。今日の授業で詩の朗読が重要視される背景として、文部科学省による朗読・暗唱教材を充実が言われていることが挙げられるのではないだろうか。朗読・暗唱の意義を次のように提言している。

「ことばは、音声面の表徴として、リズムやひびきを伴って人の感性に訴え、言語感覚を触発して一定の印象を与えるものである。朗読や暗唱は、言語の意味の知的分析がややもすると理屈にはしりがちな読みから読者を解放し、言語記号の音声的側面に触れさせるものである。特に今日の情報化社会において、言語教育は実利実用のコミュニケーション能力の育成を第一義とするものだが（それが重要なことは言うまでもないが）、音声化することで初めて知覚される言語の音声的側面の受容も軽く見てはならない。言語は、音声的な印象をもって知覚・受容されるものなのである。」¹⁸

言葉を声に出して読むことで、黙読しているだけでは伝わらない、直感的な言葉の印象などを感じることができるであろう。さらに、朗読してみte感じたことを学習者同士で論議し合うことで、詩を読んだ感想などを共有できるのではないか。言葉の意味だけで得られた詩の読みにはなかった読みを得ることができるかもしれない。ただ詩を朗読するだけで終わってしまつてはもったいない。

- ・印象に残った詩を一編選んで、4百字程度で感想を書いてみよう。

〈考察〉

単元で取り上げられた3つの詩から、一つ学習者が気に入った詩や、印象的な詩を取り上げて、感想文を書く課題である。「シジミ」を選んだ生徒はどのような感想文を書くだろうか。やはり、それまでの課題で注目していた「私」の思い対する感想や、表現からえられる印象について書くだろうか。授業後の感想文や鑑賞文はそれまでの授業で扱われた詩句に左右されることが予想される。学習者にとっての「シジミ論」を書くことができるように、授業中の課題設定では、学習者の読みが固定的にならないように、注意しなければならない。

第3節 本章のまとめ

現在の学習の手引きから、出題される傾向として、以下4つの共通点がみられた。

¹⁸ 文部科学省ホームページ 教科書の改善・充実に関する調査研究報告書（国語）－平成18、19年度文部科学省委嘱事業「教科書の改善・充実に関する研究事業」－第1章 4. 2. 11の個別テーマについて より抜粋。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/08073004/002/005.htm

- ①表現技法
- ②作者の心情や思いを問う
- ③朗読
- ④感想文、鑑賞文

それぞれの学習課題の考察で述べたとおり、問題点が存在する。詩教材や出版社によって、出題内容に多少の違いはあるにしても、全体として出題傾向が同じであるということは、どの作品にも当てはめることのできる学習課題が提案されているということである。それでは、詩を表面的にしか読むことのできない課題になってしまっているのではないか。それぞれの作品が持つ持ち味や特徴によって、学習課題を考えていくべきである。

さらに、詩を学ぶ時代によっても学習課題は変化すべきである。今私たちが生きている時代と詩を結びつけて、今日の問題として捉えていくことで、詩を読む今日的価値が生まれ、新しい詩教材の可能性を見出すことができるのである。

全体として、学習者詩に書かれていることを評価する課題がみられなかった。「表札」の学習課題でも同じであった。詩から読み取った語り手の主張を鵜呑みにせず、その主張に対して学習者がどう受け止めるかを問うことで、学習者の中に葛藤が生まれ、本当の意味で詩を読む価値が生まれてくるだろう。

第5章 石垣りんの詩を用いた新しい授業の提案

現在の学習課題にみられる特徴と傾向の考察によって得られた改善点を踏まえて、新しい学習課題の在り方を提案する。今まで教科書に掲載されてきた詩、掲載されてこなかった詩を扱うことにする。またそれらを同時に読んで比較する課題を提案することで、石垣りんの詩の教材としての可能性を広げる。

第1節 「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」を教材にした授業

第2章 第1節で「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」がジェンダーを考える国語教材としてどのような今日的価値を持っているかを明らかにした。それを踏まえて、学習課題を提案する。

第1項 学習課題

①それぞれの連に書かれていることをまとめ、簡単にコメント（疑問や違和感など）を記せ。

〔設定理由〕第8連までである長編の詩であるため、それぞれの連に書かれていることを把握し、書かれていることに対する疑問や違和感、最初に読み取った語り手の主張していることなどをコメントとして書いておくことで、その後の学習に活かす。学習者がどのようなコメントをしたかによって、その後の授業の進展が変わってくると考えられる。この詩で語り手の主張が表現されている部分は第6連から第8連までと考えられる。コメントによって学習者がそれらの連をどのように捉えているかに注目したい。初読の段階で書くコメントであるため、この詩を学習した後の学習者の読みと比べることによって、変化を読み取ることが可能である。

②詩の中に表現される呼称の変化について、その意図と効果を述べよ。

〔解答例〕「私」という一人称から始まることにより個人の具体的な問題として書き始め、「私たち」「母や、祖母や、またその母たち」「女」と三人称に変化していくことで、述べられていることが抽象化されている。「私」だけの問題ではなく、「私」を含めた世間の女性たちに視線を広げていくことにより社会全体の問題として扱おうとしている。

〔設定理由〕詩の書かれ方の特徴に注目することで、具体的事象から抽象的事象へ移行する効果を感じさせたい。この詩は、女性であり労働者である「私」の日常生活から感じられる問題意識が、一つの考え方を生み出す。それは、「私」という個人のみに当てはまることではなく、過去から現在に至る私を含めた「女性」に当てはまるものである。私から発信された問題意識を私以外の女性たちと共有することができる仕組みになっていることに

気付かせたい。「私」と表現されたとき、「私たち女」と表現されたとき、それぞれに意味があるということに学習者は気付くことができるだろう。

③「私たちの前にあるものは／鍋とお釜と、燃える火と」の後には何が続くと考えられるか。

〔解答例〕 幾たりかのあたたかい膝や手。

〔設定理由〕「幾たりかのあたたかい膝や手」とは家族のことを示している。女たちの前にはいつも家族がいて、その家族への愛情ゆえに炊事が無意識のうちに女の労働になり、利益を目的としない奉仕の姿になっていたと書いている。炊事には鍋や釜や火などの道具が欠かせないものであったが、同様に家族の存在も欠かせないものだったのである。炊事という労働が家族に対する愛情によって長い間従事してきたものであったように、愛情を持って「政治や経済や文学を勉強しよう」ということが、語り手の最も主張したいところである。最後の第7連、第8連に表現される読み手にとって革命的だと思われる思想を読み取るために第6連の最後に暗示されたものを読み解く必要がある。

解答例では「幾たりかのあたたかい膝や手」とした。しかし学習者の中には「政治や経済や文学」と答える者もいるかもしれない。「鍋とお釜と、燃える火」が炊事を象徴するものであると考えたならば、炊事と同等に並ぶ労働として作者が考えるものは「政治や経済や文学」ということになるだろう。

④この詩から読み取れる語り手の主張を明らかにせよ。また、その主張に対するあなたの考えを述べよ。

〔解答例〕炊事が女の役目であることを肯定的に受け取り、家族への愛情を持って炊事を行ってきたように、政治や経済や文学も人間への愛情を持って勉強し、炊事などの家事から得た知恵や工夫を社会に活かすべきだという主張。私はこの主張に対して、賛成できない。女性が行ってきた炊事に価値を見出すことは重要なことであるが、そのことによって社会的に家庭に縛られてきた女性たちを解放することができるのか疑問だからである。現在の家庭事情を考えると、母親が炊事を担っている現状があることは無視できない。

〔設定理由〕語り手の主張を明らかにし、その主張に対して評価をすることで、現在の問題と照らし合わせることができる。解答例とは逆にこの詩の主張に感動し、新しいものの見方を発見することができた教材として評価する学習者もいるだろう。どちらにしても、ここでは自分たちの問題として詩を読むための課題とする。

第2節 「儀式」を教材にした授業

今まで教科書に掲載されてこなかった「儀式」を教材として扱う。この詩は、「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」のように直接的に女性の立場に対して問題を投げかけている

ものではない。だからこそ作者が意図しないところでジェンダー意識の偏りが隠れていないかを考えたい教材である。詩の中で明確にされていないジェンダーへの認識を読み取るためには、学習者の読む力が必要になると考えられる。

第1項 教材観

「儀式」は、1973年9月『婦人之友』に掲載された作品¹⁹である。母親の役割として、娘に生きていく方法を教えなければならないことを示した詩である。

私たち人間は他の生命を犠牲にし、それを食すことによって生きている。命あるものの犠牲の上に生きてきたことは、昔も今も変わらず、これから先も食べなければ生きていくことはできないのである。しかし、現在では私たちが家庭で料理しやすいように加工され、パッケージされた商品がスーパーに並ぶ。それを材料と呼ぶようになったのは、パッケージされた商品が売り出されるようになった、1960年代後半のことであると考えられる²⁰。それまでは、魚まるまる1匹を目の前に、人間は命ある魚に包丁を入れて調理し、命の犠牲のありがたみをかみしめて料理することができたであろう。そのような機会がなくなってしまった現代を生きる私たちは、一つの命を食していることを忘れてしまっているのではないか。人間が生きるということが生命の犠牲の上に立っているということを、料理を通じて娘に教える母親の役目から読み取ることができる。

母親が台所に立ち、炊事の仕方を娘に教えるというこの詩の内容から、当時の女性の役割を読み取ることができる。1973年(昭和43年)に発表された詩であるが、当時そして今も女性は料理を含めた家事ができて一人前だと考えられているのかもしれない。「儀式」にはそのような社会の価値観が反映されていると考えられる。母から娘へ受け継がれてきた炊事を含む家事をこなし、家庭を守ることが女性の役割として当然のこととして考えられてきた長い歴史がある。「儀式」が書かれた当時は、女性の立場が見直されつつあった変動の時代であった。制度上は女性を家庭に縛りつけていた家族制度が廃止され、女性の労働条件も見直されてきた。しかし、制度や法律で獲得した女性の権利と現実の女性の生活との間には差があったことだろう。男女同権が叫ばれ、女性としての権利が確立された現在と「儀式」に描かれる女性の役割を比較することにより、本当に現在の女性の権利は確立されたのか、学習者に考えさせることができるだろう。

「儀式」は女性に限らず、「生きる」ということに問題意識をもった作品であることにも注目したい。前述したとおり、人間は生きるために他の命を犠牲にしているという事実を自覚しなければならないことをこの詩は表現している。そこをさらに突き詰めて考えてい

¹⁹ 石垣りん (2001)『石垣りん詩集 略歴』童話屋 初出一覧 p.156 より。

²⁰ 日本ビニル工業会 ストレッチフィルム部会ホームページ (食品包装用塩ビラップの歴史と私たちの生活) 参照。

<http://www.vinyl-ass.gr.jp/sf/life.html>

くと、人間は食べることを以外においても、生きていくために他人を犠牲にしているということが言えるのではないだろうか。高度経済成長期においては、労働者は富を得るために身を粉にして働いた。その裏には、家庭という犠牲があったことだろう。現代社会においては、就職難の時代であり、多くの就職希望者が少ない椅子をかけて競争する。誰かが就職すれば誰かが落とされ、犠牲になるのである。生きていくためには多くの犠牲を伴うということを忘れてはいけない。以上のような意味では「儀式」はジェンダーの問題を越えて、人間が生きることについて考えさせられる教材であり、競争社会に生きる学習者たちの生き方を考えさせられる教材である。

第2項 学習課題

①この詩を読んで、注目した表現や気になる表現に線を引き、その表現から湧くイメージや感想、疑問を書け。

〔設定理由〕生徒にとって「儀式」に描かれる場面は異質なものであり、日常にはないものへの違和感を抱くことであろう。まずはその表現を取り上げさせて、この詩を考えていく出発点とする。生徒の反応としては、この詩と現代とを比較して答えることが予想される。この詩に書かれている母親の役目は本当に母親の役目なのか疑問であるという反応や、儀式とは何の儀式であるのか、など多くの反応が期待できる。この課題により、初めて読んだ段階でどこまで生徒たちが「儀式」について深く考えることができているかを、授業者が把握するためにも有効な課題であると考ええる。

②この詩で語り手は母親をどのような存在として描いているか答えよ。語り手が描く母親像と自分自身が持つ母親像とを比較して、共通点や相違点を明らかにせよ。

〔解答例〕家事をこなし、それを成長した娘に教える役目を持った人物。台所仕事を教えることを一つの例として、娘に女性としての生き方を教えるべき存在。当時の「女性」の象徴として家事に従事する存在。親の役割として子供に生き方を教える点では共通しているが、母親が娘にだけ料理を教えるのはおかしい。

〔設定理由〕この課題を考えることで、詩に描かれた母親像を読み取ることができる。ここで書かれた母親像は語り手が置かれた時代や生き方、考え方が反映されたものであるため、語り手の立場を考えるためにも必要な課題であると考えられる。語り手に意識を向けることによって、語り手がどのような人物設定をして、なぜそのように描いたか、語り手の意図を読みとることを目標とする。その上で、学習者自身が持つ母親像と比較させる。学習者それぞれが持つ母親像は多様であるため、共通点・相違点は様々な意見が出ることが予想される。母親は家事に従事する存在ではなく社会に出て働いている、逆に自分の母親も家事に従事する存在である、などである。この比較によって、「儀式」を現在の問題として考えさせ、自身が持つ母親像を改めて考えさせる機会となる。そして、学習者がジェ

ンダーの問題を「儀式」から考えるきっかけになるのではないだろうか。

③「儀式」とは何の儀式だと考えられるか、またそのように考えた理由も示せ。

〔解答例〕成人の儀式。成長した女が一人前になって生きていくために、母親が娘に料理を教える儀式であると考えたため。

〔設定理由〕課題①の疑問として示されると予想される「儀式」の意味を問う。詩の題について考えることによって、詩全体の意味を吟味する必要がある。詩本文に答えがないので、詩の内容と自分の知識をあわせて考える必要がある。この詩をどのように解釈するか、学習者の多様な答えを期待した課題である。解答例に示したもの以外に考えらえる解答として、生け贄の儀式だと答える可能性も考えられる。新しいまな板やよく研いだ包丁から神聖な雰囲気を感じられ、人間が生きていくために魚などの生き物が犠牲になる儀式であるとも考えられるのではないだろうか。

④「パッケージされた肉の片々を材料と呼び／料理は愛情です、／などとやさしく諭すまえに。」と表現した意図を明らかにせよ。

〔解答例〕第2連に書かれているように、これまで人間は自らの手で命を奪い、その音や感触などを感じながら調理することで命あるものを食べてきた。命の犠牲の上に人間の命があるということを、感覚から受け止めてきたのである。それは母から娘へ代々伝わるものであった。しかし、現在では包装技術の進歩や大量生産の時代になり、プラスチックのパッケージに包まれた状態で材料を買う時代である。そこに命の原型はもはやなく、ただの肉の塊として大量に並べられた商品でしかない。そのように命を感じることができなくなってしまったものを材料と呼ぶ。そして、こま切れにされた肉などの材料を手にして「料理は愛情です」とよく料理番組などで言われるが、元来料理というものはそんな生易しいものではないのである。もっと残酷で生々しいものであったはずが、今では肉を切る感覚や血のぬめりの感覚を体験することがなくなり、私たちは自分たちの命をつなぐために犠牲にしている命があるのだということを忘れてしまっているのではないかということ表現している。母親は娘に生やさしいことを言う前に、魚や肉を丸ごと一匹使った料理を実践して生きることを娘に教えるべきだということを強調したいのだろう。

〔設定理由〕この3行に「儀式」の詩にみられる問題意識が表現されていると考えられるため、語り手が表現した意図を考えることで「儀式」を書いた作者の問題意識のもとにある社会背景を読み取り、学習者は新しい認識を得ることができる。学習者にとっては、第2連に書かれていることが異様で、この課題に挙げた3行に書かれていることのほうが日常であるだろう。語り手の問題意識に出会うことで、学習者は新しいものの見方を身につけ、自身の中に新しい問題意識を発生させることが可能であると考えられる。

⑤この詩の口調からどのような印象を受けるか。そこから読み取れる語り手の人物像を明

らかにせよ。

〔解答例〕文末の表現が簡潔で、鋭い印象。語り手は巧みな言語表現を使い、自分の主張を鋭い目線できっぱりと示していることがわかる。現状に問題意識を持ち、詩を用いて効果的に読み手に伝えようとしている。

〔設定理由〕詩の口調に注目することで、語り手の巧みな言語表現が読み手に感動や共感を与えていることに気付かせる。そして、詩の表現から語り手の人物像を読み取る。調べ学習としてインターネットなどから石垣りんの生い立ちや作品について調べることは難しいことではない。しかし教材本文のみから得られる情報をもとに、この詩を語った人物の背景にあるものや考え方を推論していく学習は詩にみられる表現一つ一つを読み解く力を必要とし、読む力を育てることができると考える。

⑥「長い間／私たちがどうやって生きてきたか。／どうやってこれから生きてゆくか。」を娘に教えるのが母の役目と考える語り手の主張をどのように評価するか。あなたの考えを述べよ。

〔解答例〕私たち人間が生きていくためには、他の命を犠牲にしなければ生きていくことはできない。炊事は人間が生きていくために不可欠な命を調理し、食事を作る仕事であり、その重要な役割を担ってきたのは、女たちである。長い歴史の中で家庭を守る役割を果たしてきた女の生き方、そしてこれからも女性がその仕事を担っていかなければならないということを、母から娘へ伝えていくことは意味のあることだと考える。しかし、女性たちが家庭に縛られ、社会的地位を得ることなく過ごしてきたことは事実であり、現在でも母親が台所の仕事を引き受ける家庭が多くみられる。今まで女性が行ってきた家事を否定するわけではないが、歴史的に強いられてきた女性の役割を見直し、社会の女性に対する考え方を変化させていかなければならないだろう。

〔設定理由〕最後の3行にこの詩で一番伝えたいことが述べられている。これまでの課題で、「儀式」に描かれた母親像を読み取り、語り手の人物像を読み取ってきた。この3行に書かれた語り手の主張を批評することで、学習者自身の問題意識を浮き彫りにし、今まで読み取ってきた語り手の問題意識と照らし合わせて、評価することができると考えられる。

第3節 2つの詩を比較して読む授業

第1項 「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」と「儀式」との関連性

2つの詩を比較して読むことにより、ジェンダーの問題を考える教材として、さらに可能性を広げることができるのではないかと考えられる。一つの詩を読むだけでは読み取ることができないような語り手の問題意識や人物像を学習者自ら発見することにより、語り手の主張に対して共感を得たり、批判したり、考え直すことを自発的に行うことができるの

ではないかと考える。読み取った問題意識について学習者が評価することで、詩の世界と現実の世界を結び付けることができるようになるだろう。

2つの詩が成立した時期は異なり、「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」が書かれてから約20年後に書かれた詩が「儀式」である。同じ「台所」を舞台にした詩であっても、書かれた時期が異なることで、作者の問題意識が変化し、詩に書かれた視点も変化している。この変化を読み取ることで、社会がどのように変化したか、そして現在の問題として考えられることを導き出したい。

第2項 学習課題

①2つの詩にみられる共通点を挙げよ。

〔解答例〕炊事は女性の仕事で、母から娘へ長い間受け継がれてきたものであること。

〔設定理由〕2つの詩に共通点を見出すことにより、作者の共通する視点を発見するための課題である。どちらの詩も女性の役割が台所に立って食事を作ることにあったということ、そして歴史的に受け継がれてきたことを表している。また、女性のこれからの生き方を示唆するものである。

②2つの詩から、時代背景がどのように変化したと考えられるか。

〔解答例〕「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」が描かれた時代は、まだ女性の地位が確立されておらず、これから社会に進出する女性たちが増えようとしているときである。作者は女性の立場を見直され始めたことを敏感に感じ取った。作者は戦前から労働者として社会に出ながら詩を書く文学者であり、女性であるという立場から生じる社会と家庭への思いから、いち早く女性の地位を見直そうとした。「儀式」が描かれた時代は科学技術が進歩したことにより、食材など何でも手に入る便利な時代が到来した。戦争直後は男性と女性の地位の格差が作者にとって重要な問題であったが、時代の変化を経て、男女の違いを越えて人間が生きるということを問い直さなければならない時代へと変化した。

〔設定理由〕戦後女性の労働者が増え始め、制度上は女性が参政権を持ち、社会進出する機会が増えた。しかし、女性の就学率や進学率が高くなったとはいえ、まだ知識が十分でない女性が政治参加を果たしたことなどから、まだまだ女性の社会進出は遅れていた時代であると考えられる。作者は其中で労働者として働き、詩を書き、家庭を支える女性として多くの役割を担っていたことで、制度と現実の狭間で矛盾を抱え、詩を書いたと推測できる。それから20年の時を作者は日本の高度経済成長期の中で過ごすことにより、科学技術の進歩や雇用の拡大を経験したことだろう。それに伴って、人間が作ったコンビナートから排出される有害物質などの公害を目の当たりにし、雇用の拡大から労働者は生活の中で働くことに重点をおき、豊かになる代償として家庭が犠牲になる様を見てきた。作者の抱く問題意識は人間が生きるために犠牲にしているものへと変化したのである。

③課題②で明らかにした時代背景をもとに、炊事に対する意識の変化を読み取れ。

〔解答例〕「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」では、女性が行ってきた炊事が家族への愛情ゆえに長い間行ってきたものであるのと同じように、政治や経済や文学に対しても人間への愛情を持って勉強していこう。また、炊事で得られた知恵や工夫を社会に生かそうと語り手は主張する。「儀式」では、炊事という仕事を通して、人間が生きていくということとは他の命の犠牲の上に成り立っているということを身を持って感じさせることができると考えている。炊事を女性が行う労働として価値のあるものとして描き、女性が社会進出するための意味を見出して女性の地位を確立していこうとする姿勢から、人間が生きていくためには他の命、さらには他人を犠牲にして生きていることを私たちは自覚する必要があると伝えたかったのだと読み取れる。「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」は女性に対する問題意識を描くものであるが、「儀式」はその段階を越えて、男女含めた人間が「生きる」ということを言及した詩になっている。

〔設定理由〕課題①で同じ「台所」に立つ女性を描いたものだとすることを明らかにしたが、この課題では「台所」に対する視点が異なることを学習者に捉えさせたい。変化を見することで、作者の意識が女性だけの問題から人間の問題として広がっていることを読み取るための課題と考える。

④「人間は何かを犠牲にして生きている」具体例をあなたの経験や知識から述べなさい。

〔解答例〕大学受験。自分の希望する大学に合格するためには、他の誰かが犠牲になり、不合格になればならない。

森林破壊。私たちが暮らしていくために必要とする家を建てるには、木材を必要が必要である。しかし、森林を伐採することにより、そこを棲みかにしていた動植物たちの犠牲、森林伐採から来る環境への影響を受ける人間の犠牲が考えられる。つまり、自分自身も犠牲の対象であると考えられる。

〔設定理由〕特に「儀式」を深く読むことを目的とした課題である。「儀式」単独の学習課題では導き出せなかった課題を生徒に考えさせる。学習者から具体例を示させることによって、人間が生きることによって生じる犠牲を生き物だけではないということ、他者を犠牲にしていることや、また自分自身も犠牲にしていることに気付くことができるのではないかと考える。

第4節 「喜び」を教材にした授業

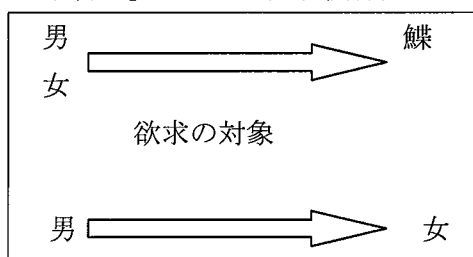
第1項 教材観

1980年「文藝」²¹で発表され、第四詩集『やさしい言葉』に収録されている詩である。作者が青森県八戸に旅行した先で目にした男とその連れの女と店員のやりとりを詩に書いたと思われる。鰯の生きづくりを囲んで行われる人間の行動を語り手が客観的な視点で描いている。この詩では鰯の姿を「スカートのようにひろげてみせた魚」や「白く透きとおるほどの」といった表現がされていることから、鰯を女性に見たてていると考えられる。「ひろげてみせた」という表現から、「男」や「連れの女」を対象として自分の姿態を魅力的に見せようとしているかのように語っている。ここから、男性に対して自分の姿を美しく見せようとする女性の姿を読み取ることができるのではないだろうか。鰯に「お酒をやると喜びます」と店員が言う。鰯がお酒を飲んで喜ぶという表現は比喻表現であり、まだ生きている鰯の口がお酒を流したときに何らかの反応で動くだけのことで、鰯に「喜ぶ」という感情はないのである。しかし、店員は客を喜ばせるために、「喜ぶ」と表現したのである。男は鰯が喜ぶ動きを見たいという自己の欲求を満たすために魚の口に酒を注ぐ。つまり男の欲求の対象として鰯が存在するのである。そして「連れの女」も男を真似て、魚を欲求の対象にしてお酒を注ぐ。その女は女性のように描かれた鰯と同様、男の欲求の対象にされていることに気づいていない。だから鰯に酒を注ぐことができたのだろう。鰯の「喜び」は自分を食べる人間（男・連れの女）から酒をもらい、食べられることによって人間の食欲を満たすことであり、同様に女の喜びは男の欲求を満たすことによって得られるものとして描かれている。語り手の目にはこの光景がおかしく見えたのだろう。もしくは、語り手が意図していないところで読み手に感じさせる人間と鰯の関係と男女の関係のおかしさが出ているのかもしれない。

最後4行の描写は鰯のことを表現したものだだろう。生きづくりにされ、半身しか残さない体になっても、鰯は「まだ生きている」のである。そこから生き物の「生に対する執着心」を読み取ることができる。

この詩から登場人物の関係性を明らかにし、この詩の違和感を学習者が抱くことによって、男性と女性の関係性をもう一度見直す機会にしたい。男性は女性を欲望の対象として見てはいないか、また女性は男性の欲望の対象にされているかもしれない、という問題意識を抱くことができる教材として扱うことができると考える。

〈「喜び」における人物関係〉



²¹ 石垣りん（2001）『石垣りん詩集 やさしい言葉』 童話屋 初出一覧 p.116 より。

第2項 学習課題

①この詩の中で「鰈」はどのように描かれているか。「鰈」を表現している箇所に線を引き、そこから「鰈」が象徴するものを明らかにせよ。

〔解答例〕

「生きづくり」・・・日常でありながらも残酷さを感じさせる。人間に食べられる存在としての鰈。

「自分の姿態をスカートのようにひろげてみせた魚」「白く透きとおるほどの身の置きどころ」・・・女性を象徴して描かれる鰈。

「パクッとうごいた」・・・「男」や「連れの女」の欲求を満たすことで鰈が喜んでいるように描く。

「—まだ生きている」・・・半身の状態になっても、まだ生き続けていることから、「鰈」の生に対する執着心を読み取ることができる。

〔設定理由〕この詩の中で「鰈」が何を象徴しているかを考えることは、この詩からどんな問題意識を持ち、何が表現されているのかを読み解く手がかりになる。特に注目させたいところは、「鰈」がスカートをはいた女性のように描かれている所である。そして「ひらかれ／そがれ／並べられた／」というところは受身の表現が使われ、「ひろげてみせた」というところは能動的な表現になっているところである。鰈を半身の状態にして、皿の上に並べたのは人間であり鰈の意図ではない。しかし、鰈の体を「スカートのように」見せたのは、鰈自身であるという描き方である。鰈は食べられる対象である客の男やその連れの女に自分の姿を魅力的に見せ、食べられることを自ら望んでいるように見えたのでないか。同じように考えると女性は男性に対して自身の姿を魅力的にみせ、男性の欲求に応えることに喜びを見出すことを表現していると読むことができる。この詩における「鰈」の隠された役割を考えさせるための課題とする。

②詩に出てくる登場人物はそれぞれどのような存在として描かれているか答えよ。それぞれの関係性にも触れよ。

〔解答例〕男→鰈に酒をやり、鰈を食べることで自己の喜び、つまり欲求を満たす。同じように女を連れることによっても欲求を満たす存在。

店員→男と連れの女に鰈の生きづくりを提供する。鰈に酒をやると喜ぶことを教える。客の欲求を満たし、相応の対価をもらうことを喜びとする。

女→鰈と同様に男から欲求の対象にされていることに気づかずに、自分も鰈に酒を飲ませることで欲求を満たす。

〔設定理由〕「喜び」は登場人物同士の関係を読み取ることで、詩に隠された意味を理解することができる。この課題により、それぞれの欲求の矛先がどこにむいているのかを考えさせたい。課題①で読み取った「鰈」が象徴しているものと関連づけて考えることで、「喜

び」の読みが深まると考えられる。

③「喜び」からどのような問題意識を読み取ることができるか。

〔解答例〕女性が男性の欲求を満たす存在として扱われていること。そして、そのことに女性が気づかず、当たり前のように思っていること。

〔設定理由〕課題①～③で登場人物の関係性を明らかにし、それぞれの「喜び」の矛先を明らかにした。詩の内容を理解した上で、そこにどのような問題意識を見出すかを問う課題である。この詩はジェンダーに対する批判的な意識を、日常のやり取りの中での違和感を抱いたことにより表現していると考えられる。誰もが「ふつう」だと思っている生活の中にも、ジェンダーの問題が隠れていることに気づき、詩に表現しようとした語り手の姿勢を学習者に感じさせることができる。語り手が意図していないにしても、詩から問題意識を読み取ることで、学習者の認識に葛藤を与えることができる。学習者自身の生活の中にもふつうだと思っていたことの中に、実はおかしいことが隠れているかもしれないという認識が生まれるきっかけとしたい。

④課題③で読み取った問題があなたの日常生活の中にも言えることはないだろうか。具体的な例を挙げよ。

〔解答例〕女性が男性の好みに合わせた服装やしぐさをすることが良いとされていること。

〔設定理由〕この詩から読み取った問題意識を学習者自身の生活と結びつけることで、自身の問題として考えさせる。課題④の解答例に示した問題は現在の社会の中にも見られることだと考えられる。女性雑誌では男性にモテるファッションが特集されているなど、学習者の身の回りで考えることができる材用は多数存在しているだろう。女性と男性の問題が詩の中だけにあるのではなく、自分にも関係していることであることに気づき、関心を持たせることを目的とする。

第5節 本章のまとめ

本章では、石垣りんの詩を読むために新しい学習課題を提案した。「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」を教材として読むことで、学習者は当時の革命的思想を味わい、感動や批判を通じて新しい労働に対する価値観を得ることができる。この詩には、語り手のジェンダーに対する問題意識が明らかに示されているため、学習者がジェンダーを考えるための教材として扱いやすい詩であると感じた。それゆえに、学習者が持つ問題意識をより明確にすることができ、現在の女性像を見直すための教材として価値を見出した。「儀式」は、「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」とは異なり、ジェンダーの問題を明確には表現していないため、詩に描かれた母親像と現在の学習者が持つ母親像との比較により、学習者のジェンダー意識を詩に向けようとした。あまり明確に示されていない問題を読み解くに

は、学習者の詩を読む力を必要とするため、国語科の教材として価値があると考えられる。そして、「儀式」は「生きる」ということをテーマにしている詩であるということも言える。学習者がこれからの生き方を考えるための教材としても扱うことができる詩であることが明らかとなった。

次に2つの詩を比較して読むことで、1つの詩だけを読み取るだけでは明らかにできなかったことを発見することができる可能性を見出そうとした。共通点や相違点を見つけることで、同じ作者の詩でも、問題意識が変化している。その背景には、時代の変化とともに、語り手が置かれている立場の変化や日常生活の変化があることを読み取ることができた。

「儀式」と「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」は同じ「台所」を舞台にした詩であるにも関わらず、書かれていることが異なる。ここで2つの詩を比較することで学習者の葛藤を生み、詩を深く考えることができるのである。また、詩を読む際にジェンダーに焦点を当てることが教師の押し付けになるとも考えられるが、2つの詩を比較することで、学習者が自発的に詩にみられるジェンダーの問題意識を読み取ることが可能になった。「喜び」は、さらに新しいジェンダーへの問題意識と詩の読みを学習者に与えることができる詩である。詩に描かれた「鰯」と男女の関係性が表現する違和感を学習者が感じ取り、学習者自身の問題として消化されていく。学習者は語り手の意図しないところにも男女観の偏りを見つけ出し、自分自身の経験に当てはまることがないか考えることで、問題意識を形成していく。

本章では3つの詩を取り上げて学習課題を提案することにより、学習者に何を考えさせることができるかを考察した。1つの詩だけでも考えられることは多くあるが、複数の詩を同時に読むことでさらに発展させて詩を読むことができる。石垣りんの詩からジェンダーへの問題意識やジェンダーの問題を越えて「生きる」ことへの認識など、多くのことを学ぶことが可能であるということが明らかになった。

終章 研究の成果と今後の課題

本論文の目的は、国語教材が学習者のジェンダー意識の形成に大きな影響を与えるという考えから、学習者の意識に葛藤をもたらす教材として石垣りんの詩の可能性を考察することである。

得られた成果として、石垣りんの詩がジェンダーを学ぶ教材として今日的価値があるということを教材解釈の中で読み取った。詩が書かれた時代の女性の立場と現在の女性の立場は異なり、ジェンダーに対する問題意識も変化している。しかし、当時の女性がどのような地位にあったのか、またそこに語り手がどのような問題意識を持ち、解決していこうとしたのかを読み取ることで、学習者にとって新しい物の見方を学ぶことができる。そして、現在との比較や学習者自身の認識と詩の認識との比較によって、詩を批判的に捉え、変化した時代をもう一度見直すことができる。学習者のジェンダーに対する問題意識の明確化や新しい発見につながるのである。

比較するという点では、同じ石垣りんが書いた2つの詩を比較することにおいても新しい可能性があることが分かった。1つの詩を読むだけでは読み取ることができなかった新しい読みを導き出すことができる。また、詩から得られる情報のみから詩の作者像や時代背景を推察することができ、作者の生き方や考え方を前提にしない詩の解釈が求められる新しい詩の授業の可能性を広げることができると考えられる。ここでは、2つの詩を関連させて読む必要があるため、学習者の言語能力を向上させる効果もあることが言えるだろう。

石垣りんの詩に焦点を当てながら、詩教材を扱う価値を考えることもできた。教科書の学習の手引きから、教科書が想定する詩の授業について考察した。その結果、朗読する課題や鑑賞文を書く課題など、どの教材の学習課題にも同じような傾向が見られるということが分かった。詩の朗読や鑑賞を否定するわけではないが、詩教材それぞれの特色を生かした授業中の提案が必要であるし、詩教材から学ぶことをもっと広げることができると感じた。

本論文はジェンダーの視点で石垣りんの詩を読むことが主眼であった。しかし、多くの詩を読む中でその価値はジェンダーを考えるための教材にとどまらず、様々な問題を学習者に投げかける教材として取り扱うことが可能であることが分かった。それは、ジェンダーに対する問題を含めた、人間が生きるということについて考え直し、学習者がこれからの社会をどのように生きていくかという生き方を考える機会を与えるものであった。ジェンダーの問題を越えて、今回取り上げた詩以外の作品も読み込んで行くことにより、学習者にさらに発展的な問題を考えさせる可能性を大いに感じた。

今後は授業実践を通じて、学習者が石垣りんの詩をどのように読み取るかを把握し、学習課題を検討していく必要がある。学習者の実態に即して課題を提案していくことが必要であろう。石垣りんの詩を教材としてどのように位置付けるかは学習者のジェンダー意識の違いや、詩を読む能力によって変化させなければならないと考えられる。

学習者の実態に差が生じるのと同様に、時代の変化に伴って国語教育に求められるものも変化する。社会的なジェンダー意識も変化が見られるだろう。その変化に合わせて、石垣りんの詩の今日的価値を見出していく必要がある。授業者は時代の変化を敏感に感じ取ることが求められ、その時代に応じた学習課題を示していかなければならない。そして、常にジェンダーへの問題意識も持ち続け、学習者に課題を投げかけていきたい。授業者自身も自分の生き方や考え方を見直し続けることが、教材の読みを深め、授業に役立てることになる。

本論文では石垣りんの詩に焦点を当てて考察してきたが、その他の作者の詩や文章をジェンダーを学ぶ教材として発掘していくことが必要であると考え。それは文学などのジャンルを越えて検討されるべきである。あらゆるジャンルの教材を扱うことで、学習者は様々な角度から問題意識を捉え、新しい認識を得ることが可能になるだろう。ジェンダーの問題だけに言えることではない。あらゆる物事に問題意識や興味を抱き、教材を発掘していくことが今日の国語教育に必要とされているのである。

謝辞

本論文執筆にあたり、指導教官の橋本博孝先生から丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。また、守田庸一先生からたくさんのご助言を頂き、感謝いたしております。そして、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた研究室の皆様に感謝致します。

引用・参考文献一覧

引用・参考文献

- ・阿武泉 (2004) 「戦後高等学校国語教科書データベース」
- ・生田久美子 (2005) 『ジェンダー法・政策研究叢書 第4巻 ジェンダーと教育—理念・歴史の検討から政策の実現に向けて』
- ・石垣りん (1971) 『現代詩文庫 46 石垣りん』思潮社
- ・石垣りん (1983) 『現代の詩人5 石垣りん』中央公論社 p.151
- ・石垣りん (1984) 『石垣りん詩集 やさしい言葉』花神社 pp.8-9
- ・石垣りん (1987) 『ユーモアの鎖国』ちくま文庫
- ・石垣りん (1992) 『焔に手をかざして』ちくま文庫
- ・石垣りん (2000) 『石垣りん詩集 表札など』童話社「シジミ」pp.8-9 , 「表札」pp.14-16, 「崖」pp.52-53
- ・石垣りん (2001) 『石垣りん詩集 略歴』童話社 「儀式」pp.16-18
- ・石垣りん (2001) 『石垣りん詩集 私の前にある鍋とお釜と燃える火と』童話社 「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」pp.64-67
- ・石垣りん (2001) 『夜の太鼓』ちくま文庫
- ・小田啓之『現代詩手帖特集版 石垣りん』(2005) 思潮社
- ・加藤秀一『知らないと恥ずかしい ジェンダー入門』(2006) 朝日新聞社
- ・金井一郎ほか著『学術会議叢書 14 性別とは何か—ジェンダー研究と生物学の対話』(2008) 財団法人 日本学術協力財団
- ・金井景子 (2001) 『ジェンダー・フリー教材の試み—国語にできること』学文社
- ・神崎智子 (2009) 『戦後日本女性政策史—戦後民主化政策から男女共同参画社会基本法まで』明石書店
- ・児島襄 (1966) 『太平洋戦争 (下)』中公新書 pp.174-222
- ・西郷竹彦 (1981) 『詩の授業 理論と方法』明治図書 pp.129-143
- ・立川健二・山田広昭 (1990) 『ワードマップ 現代言語論 ソシユール フロイト ウィトゲンシュタイン』新曜社 「対話 ミハイル・バフチンとともに」pp.176-181
- ・田近洵一 (1996) 『国語教育の再生と創造—二一世紀へ発信する十七の提言』教育出版 牛山恵「国語教材論—ジェンダーと国語教育—」 pp.236-253
- ・富倉徳次郎 (1975) 『鑑賞 日本古典文学 第19巻 平家物語』角川書店 杉本圭三郎「平家物語に現れた女性」pp.440-448
- ・日本近代文学館『日本近代文学大事典 第一巻』(1977) 講談社 pp.92-93
- ・小学館国語辞典編集部 (1972) 『日本国語大辞典 第二版 第七巻』小学館 pp.380-381
- ・船津啓治 (2010) 『比べ読みの可能性とその方法』溪水社

- ・増淵恒吉・三谷栄一・小海永二・新田大作編（1974）『高等学校 国語科教育研究講座 第二巻 現代国語（1） 詩・短歌・俳句』有精堂出版 pp.156-159
- ・吉田瀬夫（1980）『中学校・高等学校のための 詩の読解指導』東京書籍 pp.173-185

引用・参考ホームページ

- ・文部科学省ホームページ「教科書目録」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/mokuroku.htm

- ・文部科学省ホームページ 教科書の改善・充実に関する調査研究報告書（国語）－平成18、19年度文部科学省委嘱事業「教科書の改善・充実に関する研究事業」－第1章 4. 2. 11の個別テーマについて

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/08073004/002/005.htm

教科書

- ・教育出版『現代文 改訂版』平成19年検定済、平成21年印刷、平成21年発行 石垣りん「表札」
- ・桐原書店『探究 国語総合（現代文・表現編）改訂版』平成18年検定済、平成21年印刷、平成21年発行 石垣りん「崖」
- ・桐原書店『展開 現代文 改訂版』平成19年検定済、平成21年印刷、平成21年発行 石垣りん「幻の花」
- ・桐原書店『発見 国語総合』平成18年検定済、平成21年印刷、平成21年発行 石垣りん「表札」
- ・三省堂『高等学校 国語総合〔改訂版〕』2006（平成18）年検定済、2007年初版印刷、2007年初版発行 石垣りん「崖」
- ・三省堂『新編 国語総合 改訂版』2006（平成18）年検定済、2007年初版印刷、2007年初版発行 石垣りん「シジミ」
- ・三省堂『明解国語総合』2006（平成18）年検定済、2007年初版印刷、2007年初版発行 石垣りん「シジミ」
- ・第一学習者『高等学校 改訂版 新編現代文』平成19年検定済、平成21年印刷、平成21年発行 石垣りん「夏の本」
- ・筑摩書房『現代文〔新訂版〕』平成19年検定済、2009年印刷、2009年発行 石垣りん「表札」
- ・筑摩書房『精選 国語総合 現代文編 改訂版』平成18年検定済、2009年印刷、2009年発行 石垣りん「崖」

- ・明治書院『高校生の国語総合』平成 18 年検定済、平成 19 年初版発行 石垣りん「表札」
- ・明治書院『新 精選現代文 2』平成 20 年検定済、平成 21 年初版印刷、平成 21 年初版発行 石垣りん「用意」
- ・右文書院『現代文』平成 15 年検定済、平成 21 年印刷、平成 21 年発行 石垣りん「表札」